創造者とメイドも滅びた世界からやってくるようですよ？

空箱

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて世界を終わらせた大戦争があった世界。

何所までも続く荒野と死の大気に覆われた星から、創造者とそのメイドが箱庭にやって来た。

彼とメイドは問題児たちと一緒にどんな道を歩むのか。

――――――そんな話です。

目次

プロローグ ―― 1
1．楽しめ異世界 ―― 7
2．素敵ではない出会い ―― 19
3．野獣の顔 ―― 31
4．ノリと勢いが大事 ―― 46
5．白き夜の魔王 ―― 67
6．月夜に巡らす策謀 ―― 86
7．暮れゆく箱庭の夜 ―― 106
8．ガルドのゲーム ―― 116

プロローグ

山のように巨大で、大きな大きな足が四つ付いた物体が荒野の中を進んでいく。
それはよく見ると岩と機械でできた人工物だとわかる。
その要塞のような物体の一番上上にある一室で、千宮明彦は読んでいた本をぱたんと閉じた。
「あーあ、終わっちゃった」
明彦は残念そうに本の表紙を見つめ、それをベットの上の本棚にそっと戻した。
今の時代、本というのは貴重品だ。新しく出されることはほとんどないし、たいていは発掘品だ。
最終戦争により世界の大半が命の育たぬ死の荒野と化し、吹き荒れる風は人を殺すようになったという。
一部の人間だけが衛星軌道のコロニーに逃げ出したが、地上に残された生き残りは緩慢に死に向かっている。
この本の著者も、もうとうに死んでしまっていることだろう、それでなくてもこのご時世、このシリーズももう続きが出ることはないだろう。とても残念だ。

明彦は立ち上がって窓を開ける。
外から冷たい風が吹き込んでくる、２１世紀初頭は温暖化が問題となったが、今では寒さと汚染の方が深刻だ。
だが明彦は人を数分で死に至らしめる風にも全く頓着せず、着ている汚れてボロボロの白衣を揺らしながらぽつりと言った。
「暇だな……」
明彦はぼさぼさの黒髪をガシガシとかく。
目新しさのない風景にため息が漏れる。
どこか遠くに行きたいな、そんなことをとりとめもなく考えた。
こんこんと、ドアがノックされる。
「明彦様、いらっしゃいますか？」
「……はぁ、いるよ」
「失礼します」
入って来たのはメイド服を着た女性だった。
明彦とは対照的なつややかで手入れのされた黒髪をセミロングに伸ばし、折り目正しくきびきびと動く。
その瞳は石のような黒い硬質の輝きを宿している。

「お食事の用意ができました」
「ふーん、そう」
明彦はつまらなそうメイドに向けていた視線を外した。
「お食べになりませんか?」
「あとで食べるよ」
「わかりました」
メイドの都はそう言って下がって行った。
外の眺めは何所までいっても荒野ばかり。かつての戦争で地球は山もなければ谷もない真っ平らの荒野ばかりになってしまった。時折思い出したように池のような海の名残が残るくらいだ。
何も面白いところはない、つまらない、どこまでも退屈が広がっている。
明彦はこの世界で老衰で死ぬまで問題なく生きられる自信があるが、その人生を想像してみると辟易とする。
それはきっと味気なく、退屈で、なんの面白みもない平坦な道なのだろう。
この荒野のように。
「つまらない、ああ、つまらない」
いっそのこと巨大航空艦でも作って空の果てに攻め入ってみようか。

そうすれば何か感じいることもあるかもしれない。

そんな自分勝手で壮大で子供らしくもある夢のようなことを、実際に本気で考えつつ明彦は空を見上げていた。

明彦が望んでいることは簡単だった。

感動でも、驚愕でも、なんなら危険でもいい。心を震わせる何かと出会いたい。それだけだった。

そして、明彦はふと空に何かがひらひらと踊っているのに気が付いた。

明彦が目を凝らして見ている間にそれはだんだんと近づいてくる。

輪郭がはっきりする。それは真っ白い紙を四角く折りたたんだ手紙だった。

それはすーっと風に逆らいながら飛び、そなまま明彦の部屋に入り込むと力を失ったかのように机の上にぽとりと落ちた。

「……」

振って湧いた珍事に明彦は驚き、そして笑った。

手紙にはしっかりと千宮　明彦の名前が書かれていたからだ。

つまり偶然でも何でもなく、この手紙は明彦にあてられたものなのだ。

「ふふふ……！」

明彦は早速手紙を開いて中身を開いた。
そこにはこう書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。
その才能を試すことを望むならば、
己の家族を、友人を、財産を、世界のすべてを捨て、
我らの〝箱庭〟に来られたし』

「失礼します明彦様、先ほどこの部屋に不審物が」
「ん？」
メイドの都が部屋に入ってきて明彦はそちらを振りかえるのと、手紙が光を放つのは同時だった。
主が危険と判断した都は危険から明彦を守るために抱きかかえようとし、明彦は突然のことに動けなかった。
そして二人は投げ出される。
大地には緑が広がり、その端は世界の果てのようなは断崖絶壁、天に伸びる光の柱を中心にたくさんのテントがひしめき合う巨大な街、その世界の……上空４０００メート

ルに。

すぐ近くに明彦や都と同じように、宙に投げ出された少年少女が三人。

一瞬の宙を漂い、すぐに重力にひかれ落下が始まった。

驚愕の表情を浮かべて墜落する三人と、明彦。

彼らは揃って同じことを考えた。

「何所だ此処！」

そこは完全無欠に異世界だった。

1．楽しめ異世界

ものすごい高さから落下している。下は湖だがこの高さでは慰めにもならないだろう。

明彦の周囲の空気がひとりでにうごめく、だが明彦はあえてそれをやめさせる。

わざわざ呼び出したのだからそうそうに死ぬということはあるまいと、この危機的状況で楽観視したからだ。

実際、落下途中に発生していた薄い水の膜が緩衝材となり、最終的に湖に生きて落ちることになった。

「ご無事ですか？」

水面に着地した都に明彦は抱きかかえられる、二人ともまったく水にぬれていなかった。

そこに水面から他三人が顔を出した。

「し、信じられないわ！　まさか問答無用で引きずり込んだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜこれ。石の中に

呼び出さ
れた方がまだ親切だぞ」
「……いや、石の中に呼び出されたら身動き取れないでしょ？」
「俺は問題ない」
「そう……自分勝手ね」
「三毛猫・・・大丈夫？」
「ニ、ニャ～」
とりあえず先に岸に上がった。降り立った地面には下草が生えている。それを手の平で触り、また透明で美しい水の煌めきに目を奪われる。さわさわと風に揺れる木の葉の擦れ合う音。自分の世界ではついぞ見ることのなかった本物の自然に、明彦は心奪われた。
木々が自生し、汚染されていないきれいな水がこんなにもたくさんある。荒廃した故郷と比べれば、これだけで天国といえるだろう。
「空気もきれいだし、いいなーここ」
「…ここ、どこだろう」
目を輝かせている明彦の横で、猫を抱えた少女が周囲を見回しながら無表情に言った。

「さあな、世界の果てっぽいものが見えたし大亀の背中じゃねーか？」
　金髪に炎のロゴのヘッドホンを付けた学ラン姿の少年が、服の裾を絞りながら言った。
「一応確認しとくけどよ、お前らもあのへんな手紙でここに？」
「そうだけど、その前に呼び方を訂正して。私は〝おまえ〟じゃないわ。久遠飛鳥というちゃんとした名前があるんだから。
　それからその猫を抱き抱えているあなた。あなたのお前は？」
「春日部耀、以下同文」
「そう、よろしく春日部さん。それじゃあ、そこではしゃいでるの、あなたは？」
「ん？　僕？」
「ええ、そうよ」
「僕の名前は千宮明彦、こっちは都だよ。よろしく」
　名前を呼ばれた都がぺこりとお辞儀をする。
「そう、よろしく千宮君。そちらの方はメイドさんかしら？」
「そのようなところです」
「それで最後に野蛮で凶暴そうなあなたのお名前は何と言うのかしら」
「進行役をどーも。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と

三拍子そろった駄目人間ですんで用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれ、お嬢様？」
「取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」
「ははは、マジかよ、今度作っとくから覚悟しとけ」
にらみ合ってバチバチと火花を散らす二人。
耀と明彦はそこから少し離れて我関せずと好き勝手にしている、実に見事な問題児ぶりだった。

「……で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」
「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」
「……この状況に対して落ち着きすぎているのもどうかと思うけど」
「いいじゃんいいじゃん、少しのんびりしようよ。こんなにいい天気なんだし」
「……」
ごろんと寝転がる明彦とその傍らにしずしずと控える都。
その姿に肩を十六夜は肩をすくめた。

「まあ何にせよ出てきてもらうか、そこに隠れてるやつにな」
そう言って十六夜は草の茂った森のある一点を睨んだ。
「なんだ、貴方も気付いてたの？」
「まあな。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？　そっちの猫抱いてるやつと……そこのメイドも気づいてたんだろ」
「風上に立たれたら嫌でも気付く」
「はい、わたくしは明彦様の護衛でもありますから」
「へぇ、面白いなお前ら」
十六夜はへらへらとした笑みを浮かべるが、目は笑っていない。
それは明彦を除いて同じだった。
突然異世界に呼び出されたのはまあいいとして、いきなり殺されかけたのだから当然だ。
殺気を込めて同じ草むらを睨みつけた。
その無言の重圧に耐えきれなかったのか、草むらからウサギが一匹飛び出してきた。
ただし人型の。つやのある黒い（？）髪を伸ばし、バニースーツのような服にミニスカート、そしてガーターベルト履くというきわどい格好の、頭からふさふさのウサ耳を生やした若い女性だった。

　出てきたウサギは開口一番気まずそうに笑いながらこう言った。
「い、いやですねぇ皆様。そんな狼みたいな顔で睨まれると黒ウサギは死んでしまいますよ？
　ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵にございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここはどうか穏便にこちらの話を聞いていただけたら、黒ウサギは嬉しいんでございますヨ？」
「断る」
「却下」
「お断りします」
「ぐーー」
「明彦様、起きてください」
「あっは、取りつくシマもないですね。というか若干一名寝ちゃっていますし！」
　ばんざーいと両手を上げて出てきた黒ウサギは笑顔の裏でここにいる五人を冷静に値踏みしていた。
（寝てるのとメイドさんは置いておいて、この三人の肝っ玉は及第点。この状況でＮＯと言える勝気は買いです。まあ、扱いにくそうなのは難点ですけども。というか人数が予定よりも多いのですが、結果オーライということで……？）

さてどう接するべきか。耳をピコピコしながら頭を巡らせている黒ウサギの背後に、そっと春日部耀が近づいた。

耀は黒ウサギの頭の上でピコピコと揺れるウサギ耳を、興味深そうにじっと見つめると、おもむろに手を伸ばしギュッとわしづかみにして力いっぱい引っ張った。

「えい」

「フギャーーーー!

ちょ、ちょっとお待ちを! 触るまでなら許容の内でしたが、初対面で無遠慮に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?」

「……好奇心のなせる技?」

「なぜに疑問形!? 自由すぎにも程が有りますヨ! というかアタタ! は、離してください!」

「へえ?そのウさ耳って本物なのか?」

「……じゃあ私も」

「え、ちょ…」

左右の耳を十六夜と飛鳥にひっつかまれた黒ウサギは、これから起こることを想像し、助けを乞う死刑囚のように残る二人に目を向けた。

だがメイドは黙って目をそらすと、寝ている明彦の頭を膝枕するのだった。

望みが断たれた黒ウサギは耳をつかむ二人に憐みを乞うように言った。
「や、やさしくしてください……」
「「やだ」」
耳を左右に力いっぱい引っ張られ、さんざんにもてあそばれた黒ウサギの悲鳴は、そのあと小一時間ほど森に響き続けたのだった。

「あ、有り得ない・・・。有り得ないのですよ・・・。まさかお話を聞いてもらうのに小1時間もかかるなんて・・・・・」
「いいからさっさと進めろ」
ヨヨヨと泣き崩れる黒ウサギに呆れたように言う十六夜。
時間が経過したこともあってか、明彦除く4人もさっきまでの怒りは見えなくなっていた。
少なくとも話を聞いてやろうくらいには。
それを確認した黒ウサギはさっきまでの泣き姿はどこへやら、勢いよく立ちあがり、一転して笑顔で説明を始めた。
「了解しました！　それでは皆様、定例文で言いますよ？　言いますよ？

　では、ようこそ皆様、〝箱庭の世界〟へ！　我々は皆様のようにギフトを持つものだけが参加できる〝ギフトゲーム〟への参加資格をプレゼントさせていただくために、このたび召喚させていただきました。
「ギフトゲーム？」
「ＹＥＳ！　すでに皆さんお気付きでしょうが、あなたたちは普通の人間ではありません。その力はさまざまな修羅神仏、悪魔、精霊、星などから与えられたものです。〝ギフトゲーム〟は〝恩恵〟を持つもの同士が競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭は強力な力を持つギフト所持者がオモシロオカシク生活できるよう作られたステージなのでございますよ！」
　ふりふりとしっぽを振りながら箱庭を宣伝する黒ウサギ。飛鳥は質問のために手を上げた。
「初歩的なことだけど、私たちを呼び出した〝我々〟とは貴女を含む誰か、もしくは団体なの？」
「ＹＥＳ！　異世界から召喚されたギフト所有者は箱庭で暮らすにあたって数多ある〝コミュニティ〟のいずれかに属していただきます」
「嫌だね」
「属していただきます！　そして〝ギフトゲーム〟の勝者は〝主催者〟の提示した品を

ゲットできるという仕組みになっています」
「・・・・・・・〝主催者〟って誰？」
「ゲームによって様々です。暇を持て余した修羅神仏が人を試すためと称して暇つぶしのために開催することもあれば、コミュニティの力を誇示する、拡大するために独自開催することもあります。
　前者は主催者が主催者だけにハイリスクハイリターンです。ゲームが難題だったり命の危険があることもありますが、リターンも大きく、新たな〝恩恵〟を手にすることも可能です。
　後者は参加するためにチップが必要です。参加者が敗退した場合はチップを全て開催者である〝コミュニティ〟が総取りです」
「後者は結構俗物ね・・・チップには何を？」
「そちらもまた、様々です。金品・土地・利権・名誉・人間そしてギフトなどを出せます。相手からギフトを奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能となりますが、逆に奪われてしまえばそのギフトは失われてしまいますのでお気をつけください」
「内容は？」
「それはもうゲームによって違うとしか言いようがありません。たとえば伝説になぞらえ怪物を退治するものでしたり、例えば何らかの競技で大人数で競い合う物だったり、

まさに千差万別、星の数ほど種類があると言っていいでしょう」

ふーんと明彦はおもしろそうに笑みを浮かべる。

「さて、ほかにも質問はおありでしょうか？　黒ウサギには全ての質問に答える義務がありますからどのようなご質問にもお答えします……が、どうでしょうみなさま。ここは黒ウサギのコミュニティーでお茶でも飲みながらゆっくりと続きというのは？」

「待てよ、まだ俺が質問してないだろ？」

そう言って手を上げたのは十六夜だ。しかし、そこにさっきまでの軽薄な笑みは無く、真剣な目で黒ウサギを睨んでいる。

それに気が付き、身構えるように黒ウサギも真面目な顔になる。

「どういった質問でしょうか？　ゲームのルールですか？　それとも地理や歴史でしょうか？」

「そんなのは今はどうでもいい。俺が聞きたいのはたった一つ、まず何よりも最優先に聞かないといけねぇことだ」

そこで言葉を切って十六夜は真剣に、されど傲慢ともとれるような態度で一言。

「この世界は……面白いか？」

『己の家族を、友人を、財産を、世界のすべてを捨て』

送られてきた手紙に書かれていた一文だ。

その言葉通り、此処にいる4人は全てを対価にこの世界に呼ばれた。だからこそ十六夜はこの世界にその価値はあるかと真剣に聞いているのだ。

そして黒ウサギはこう答えた。

「ＹＥＳ　〝ギフトゲーム〟とは人を超えたもののみが参加できる神魔の遊戯。外界にあるいかなるものよりも、確実に面白いことをこの黒ウサギが保証いたします」

そう言って黒ウサギは不敵な笑みを浮かべたのだった。

2．素敵ではない出会い

外壁の内部を通る階段に通じる開かれた門。
その前で少年は自分よりも幼い子供たちとともに黒ウサギが戻ってくるのを待っていた。
しかし、そろそろ2時間が経つというのに一向に戻ってこない黒ウサギに、少年はともかく幼い子供たちは我慢の限界だった。
「ジン～、姉ちゃんまだ戻ってこないの～？　俺もう疲れた～」
「わたしも～、立ちっぱなしで足が棒みたいになっちゃった～」
そう言われ、ジンと呼ばれた大きさのあってないローブを着た跳ねた茶髪が特徴の、まだ幼さの残る少年がうなずいた。
「そうだね、みんな疲れてるみたいだし先に帰っていいよ、僕はここで黒ウサギと新しい同志を待ってるから」
「えっ、帰っていいの？　やったー、立ちっぱなしででもうくたくただよ～、はやくかえろ～」
「なんだ～それなら早く言ってよ～。さきにご飯食べてもいい～？　もうお腹ぺこぺ

こ」

「うん、僕たちは遅くなるかもしれないけど、夜更かしはしないようにね」

そう言って、子供たちを見送ったジンは一人、石段の上に腰を下ろした。

前をまばらに通り過ぎていく通行人たちをぼんやりと眺めながら、ジンはこれから来るであろう新しい同士について思いを巡らせる。

（もしも、外界から来た人たちの力が大したことがなかったら、僕たちは箱庭を出なくちゃいけなくなる）

ジンが仮のリーダーを務め、黒ウサギが所属しているコミュニティーの状況は、まさに崖っぷちと言っていいものだ。

むしろ、崖に必死でしがみついているような状況だ。

このままいけばそう遠くない未来にコミュニティーは解散せざる負えないだろう。

そうなればある事情で黒ウサギ以外には子供しかいないジンのコミュニティーは、箱庭にいることはできない。

故郷を離れ、危険であてのない旅をすることになる。

そうなることを考えると、身体が震える。

だからこそ力ある同士が必要なのだ、現状を打開できるほどに大きな力を持つ同士が。

ジンはこれから来る同士を騙すことになるだろう、いや、騙さねばならないのだ。
たとえどんな手を使っても所属すると言わせないといけない。
そんな悲壮な決意を抱えるも、失敗の可能性は高いこともわかっていた。
道行の暗さにジンは頭を抱えたくなる。
しかし、それでも他にジンたちが自分でどうにかするすべはないのだ。
すでに賽は投げられた。
ジンにできるのは期待と不安、そして罪悪感を感じながら黒ウサギが戻るのを待つことだけだった。

「ジン坊っちゃーン！　新しい方たちを連れてきましたよー！」
黒ウサギは明彦達を連れて箱庭の入口までやって来た。
そこにいたのは背丈にあっていないローブを着た癖っ毛の茶髪をした少年だった。
「おかえり、黒ウサギ。そちらの四人が？」
「はいな、こちらの皆様が……え？」
ぐるりと振り返った黒ウサギがそこにいる人数を確認する。
飛鳥、耀、明彦、都。黒ウサギが目をこすっても、頭を振っても、そこに逆廻十六夜

の姿は影も形も存在していなかった。
「あ、あれ～、おかしいですね～。ここにもう一人いませんでしたっけ？　こう、ちょっと目つきが悪くて、金髪で、俺様的な雰囲気の少年が……」
「ええ、十六夜君ならさっきまでいたけど『世界の果てを見てくるから後はよろしく』みたいなことを言って反対方向に走って行ったわ」
「ど、どうして止めてくれなかったんですか！」
「……『止めないでくれ』って言われたから」
「どうして黒ウサギに知らせてくれなかったんですか！」
「『黒ウサギには教えないでくれ』とおっしゃっていましたから」
「嘘です、それは絶対嘘です、ただ面倒だっただけでしょう！」
「「うん」」
がっくりと地面に膝をついてうなだれる黒ウサギ。
しかし、ジンは顔を蒼くして慌てた。
「た、大変です、あの辺りにはギフトゲーム用の幻獣が野放しになっているはず！」
「幻獣？」
「は、はい。ギフトを持った獣のことです。特に世界の果て辺りには強力な幻獣がいます。人間じゃあとても太刀打ちできません！」

「あら、じゃあ彼はここでゲームオーバーということかしら」
「ゲームが始まってないのにゲームオーバー……新しい」
「残念、ここで彼の冒険は終わってしまった。本当言うと僕も行きたかったんだけど都が止めるからなー」
「地理も把握しないまま単独行動は危険すぎると判断しました。ご了承ください」
「みなさん冗談を言ってる場合ではないですよ！」
ジンが叫ぶも４人とも慌てて何かしようという気配はない。
正直、顔と名前を知っているだけの赤の他人が、自己判断で行動したのだから何かあっても自己責任だろうと考えていたのだ。
だから三人は肩をすくめるだけだった。
「フ、フフフ……ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが皆様のご案内をおまかせしてもよろしいでしょうか？」
ゆらり、と黒ウサギが不気味に笑いながら立ち上がる。
不穏な雰囲気にジンは思わず後ずさる。
「わ、わかった。でも黒ウサギは？」
「問題児を捕まえに参ります！　事のついでに――〝箱庭の貴族〟と謳われるこの黒ウサギを馬鹿にした事、とことん後悔させてやります」

怒りの炎を瞳の中で燃え上がらせ、黒ウサギは宣言する。
それと同時に黒かった髪の毛が、一瞬にして淡い緋色へと変化した。
「一刻ほどで戻ります！　皆様方はどうぞゆっくりと箱庭ライフをご堪能くださいませ！」
そう言った黒ウサギは地面を踏みぬき大跳躍、ウサギの名の通り弧を描きながら凄まじい速さで跳び去って行った。
その速さは明彦が見た中でも比べる者がいないくらいだ。
「……箱庭のウサギはあんなに速く跳べるのね。素直に感心するわ」
黒ウサギが見えなくなって固まっていた飛鳥はぽつりとつぶやいた。
そのまましばらく黒ウサギの去った方を見ていたが、飛鳥は切り替えてジンを振り返った。
「まあ、それはそれとして……。
黒ウサギも堪能くださいと言っていたことだし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。あなたがエスコートしてくださるのかしら？」
「は、はい。コミュニティのリーダーのジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩者ですがよろしくお願いします」
そう言ってジンは礼儀正しくぺこりと一礼する。

「皆さんのお名前をお聞きしても？」
「私は久遠飛鳥よ、そこの猫を抱えてるのが…」
「春日部耀」
「僕は千宮明彦、でこっちが都ね」
「都と申します」
「それじゃあ自己紹介もしたし、軽い食事でもしながら話しましょうか」
そういって、飛鳥はジンの手を取ると楽しそうに先頭を歩き出し一番に門を潜ったのだった。

一行は外壁内部にある石造りのトンネルを通り抜け、そこはさんさんと陽の光が降り注ぐカフェなどの立ち並ぶ大通りにでた。
その日差しに、明彦はいぶかしげに空を見上げた。
「あれ？　外から見たときは天幕があったよね、なんだか普通に空が見えるんだけど」
「あら？　そういえばそうね」
空から見たときは確かに天幕があったのに、どういうことなのか？
そうジンに尋ねると、ジンは何でもないことのように答えた。

「天幕は内壁に入ると不可視になるんですよ、もともとは太陽の光に直接触れられない種族のために作られたものですから」
「太陽の光に触れられないって、ここには吸血鬼でもいるというの？」
「？　いますけど」
「そ、そう、いるの」
　ジンがあまりにもあっさり肯定されるものだから、飛鳥はなんとも言えず黙ってしまった。
　しかし、明彦は逆に興味をひかれたのか手を上げて質問した
「はい！　吸血鬼って人を襲うって本に書いてあったけど大丈夫なの？」
「そんなことはしませんよ！　彼らは〝箱庭の騎士〟と呼ばれるほど高潔で尊敬されていたんです！
　吸血のギフトは持っていますが、別に普通の食べ物が食べれないわけではないんです！」
　なぜか語気を荒げて答えるジンに、明彦は朗らかに笑った。
「んー、そうなのか。じゃあ本の方が間違ってたんだね」
「はい、間違いありません」
　ジンは力強くうなずいた。

『にゃーにゃー』
「うん、そうだね」
　耀はニャーニャーと鳴く猫に
「？　どうかなさいましたか？」
「……別に」
「とりあえず店に入って落ち着きましょう。ジン君、お勧めの店はあるのかしら？」
「す、すみません。段取りは黒ウサギに任せていたので……何でしたら皆さんが好きに決めてくださって結構です」
「あら剛毅な話ね」
　そういうなら、と。飛鳥は周囲を見た中で目に留まった『六本傷』のマークの旗を掲げるオープンカフェに入り、日よけの白い傘が付いたテーブルに座った。
　するとすぐに店の方から猫耳と尻尾がついたウエイトレスが注文を取りに出てきた。
「いらっしゃいませ～ご注文はお決まりですか～？」
「そうね、とりあえずこの紅茶を人数分と、これとこれをいただこうかしら」
『にゃーにゃー』
　飛鳥がメニューから軽食を選んで注文する。
　それを真似るようにして、耀が抱く猫も鳴き声を上げる。

「ストレートティーを人数分と季節野菜のサンドイッチ、フライ盛り合わせ、それと猫まんまですね。承りました」
「え？」
　耀を除く4人は不思議そうに首をかしげた。
「え、三毛猫の言葉、わかるの？」
「はい、わかりますよー。何せ見ての通り私は猫族ですからね。ナイスミドルな旦那さんですし、私サービスしちゃいます」
「にゃー、ごろごろ」
「やだもー、お客さんたらお上手なんだから」
　ウエイトレスの言葉に応えるように、三毛猫が喉を鳴らした。
　そのやり取りを見て明彦も本当に意思疎通しているのだとわかった。
　ご機嫌そうに特徴的な鉤尻尾を揺らしながら店の奥に去って行ったウエイトレスを見送って。
　耀は三毛猫をなでながらぽつりと言った。
「箱庭ってすごいね。三毛猫の言葉がわかる人いたよ」
『にゃー』
　それを見て、飛鳥たちも気がついた。

「ちょっと待って、もしかしてあなたも猫と会話できるの？」
「えっ、と、猫だけじゃなくて生きているなら誰とでも話せるけど……」
「ふーん、じゃあ鳥とか熊でも話せるの？」
「う、うん、話したことがあるよ」
「それは心強いギフトですね、この箱庭では意思疎通ができない幻獣も多くいますからね」
「そうなんだ」
「はい、一部の例外を除いて幻獣たちとは何らかの意思疎通のためのギフトが必要になります。
　それだってもっと限定的なものですから、これは本当にすごいんですよ。箱庭の創始者の眷属である黒ウサギでも全ての種族とコミュニケーションをとることはできないと言っていましたし」
「そう…なら春日部さんはとても素敵な力を持っているのね。ちょっとうらやましいわ」
　それにくらべて・・・
　飛鳥は自分の力を省みて自嘲した。
　その表情を見て、耀はたった数時間の付き合いながら、似合わないと、そう思った。

「久遠さんは」
「飛鳥でいいわよ、春日部さん」
「なら飛鳥はどんな力を持っているの？」
「私の力？　あんまりいいものじゃないわ、だって「おや～？　そこにいるのはこの東区画で最底辺コミュニティー〝名無しの権兵衛〟のリーダー、ジン・ラッセル君じゃあないですか。今日は黒ウサギは一緒じゃないんですねぇ」
　飛鳥の上から目線の下卑た言葉で遮ったのは、２メートルを超える身長と、壁のように広々とした肩幅の身体をとても窮屈そうにタキシードに詰め込んだ大男だった。
　ジンは振り返ってその男が自分の知る相手だとわかると、はたから見ても嫌そうなしかめっ面になった。
「ガルド＝ガスパー……」
　ジンは苛立たしそうにその名を口にした。

3．野獣の顔

「僕らのコミュニティーの名前は〝ノーネーム〟ですよ、忘れたんですか？　ガルド＝ガスパー」
「はっ、ほざけ〝名無し〟風情が。新しい人材を呼び寄せたらしいが調子にのってるのか？　ああ？
名前も旗印も失くしておいてまあ未練がましいにもほどがあるぜ？
――――そうは思いませんか、お客人」
ジンがガルドと呼んだぴちぴちのタキシードを着た男はそう言いながら近く椅子を引き寄せてどっかりと座りこんだ。
ジンが睨みつけるが、全くの無視。それだけで、わかることがある。ジンはこの男が嫌いで、しかし、追い払うことができないくらいに力関係に差があるということだ。明彦は静かにその様子を観察した。
「失礼ですけど。突然やってきて、名乗りもせずに席に着くことは箱庭では失礼にあたらないのかしら」
「これは申し訳ない、わたくしの名はガルド＝ガスパー。箱庭上層に陣取るコミュニ

ティー〝六百六十六の獣〟の傘下である〝フォレス・ガロ〟のリーダーを務めております」

そう言って一礼するガルド。

礼儀正しいというべきなのだろうが、二メートルを超える大男がぴちぴちのスーツを着てそんなことをすると、イメージに合わないことこの上ない。

礼儀正しいのはいいが、もう少し自分に合ったたち振る舞いをするべきだと、明彦は笑いをかみ殺しつつ思った。

「たちの悪い成り上がりです。傘下のコミュニティーを力で抑えつけ、従わせる。どれだけの人間がお前をリーダーとして認めてるか……」

「口を慎めよ〝名無し〟が。自分のコミュニティーの状況ぐらいわかってんだろが、俺に逆らえばここで生きていけると思ってんのか？　ああ？」

「はい、そこまで。とりあえずあなたたちの中が悪いことはよくわかりました。

そのうえで、聞きたいのだけど……」

飛鳥はジンの方を真剣な目で睨みつけた。

「ジン君のコミュニティーの状況について、説明してもらえるかしら」

ジンはハッと気がついた、自分が失敗を犯したことに。

「あなたたちが私たちをこの世界に呼び出したのでしょう？　なら、私の質問に答える

義務があるはずよ？　違うかしら？」

「……」

縮こまるジンを見て気を良くしたのかガルドは冷静さを取り戻した。

「まあ、自分では話づらいのでしょう。よろしければわたくしからご説明しましょうか？」

そう言われ、飛鳥はちらりとジンを見るが、ジンは口をつぐんでうつむいている。

飛鳥は嘆息して、ガルドの方を向いた。

「……じゃあ、お願いできるかしら」

「はい。まずコミュニティーとは複数名からなる団体のことを指します。

小さいものでは個人的なチームから、大きなものでは国として、さまざまな形はありますがこれらすべてを指してコミュニティーと呼びます。

そして、ミュニティーは共通して〝名〟と〝旗印〟を持ちます。

特に旗印は重要なもの。この店でもそうですが、旗印を掲げることでそれが自分の持ち物であると主張することができます」

ガルドはカフェの〝六本傷〟のマークを掲げる旗を指した。

「もし手っ取り早くコミュニティを大きくしたいならあの旗印を駆けて両者合意でギフトゲームをすればよいのです、実際に私の〝フォレス・ガロ〟はそうやってきました」

自慢げに胸を張るガルド。
タキシードに描かれた虎をモチーフにした紋章が強調される。
これが〝フォレス・ガロ〟の旗印なのだろう。
「なるほど、じゃあこの辺りの店舗はほとんどがあなたの参加というわけね」
そう言われて明彦が周囲を見回せば、確かにほとんどの店に〝フォレス・ガロ〟の旗印が掲げられている。
「ええ。この店は本拠が南区画にあるため手が出せませんが、この二一〇五三八〇外門付近は全て私の支配下にあります。例外はこの店のように本拠が別の場所にあるか、名も旗も持たない虫けらぐらいなものですよ。
ゆくゆくは更に勢力を拡大し、箱庭上層目指す予定です」
そう言ってガルドは愉快そうに低く笑った。
「さて、ここからが本題ですが。この小僧――――いやジン＝ラッセルがリーダーをしているコミュニティー、じつは三年ほど前まではこの東区画で最大手のコミュニティーでした」
「あらそうなの？」
「ええ、ただしリーダーは違いましたけどね。
その男は人間としてギフトゲーム最高戦績保持者で、南や北の大手コミュニティーと

も交流のあるこのジン君とは比べ物にならないほど優秀な男でした。
修羅神仏と渡り合い箱庭上層に食い込むほどに勢力を拡大していました。
いや、ほんとにね、コレはすごいことなんですよ。
もう嫉妬を通り越して尊敬しちまうぐらいにはね――――――まあ先代の話ですが」
ガルドは何所か楽しそうに笑みを浮かべる。
「……」
「しかし彼らは運悪く、この箱庭における最悪の存在に目をつけられた。
そして彼らはギフトゲームを行い、一夜にして滅び去った。
それはもう〝天災〟と呼ぶほかありません」
「〝天災〟？この箱庭でもそんなものがあるのかしら」
「ええ、たった一つだけね。
族に〝魔王〟と呼ばれる災厄が」
魔王、ガルドのその言葉には隠しきれない畏怖と恐怖が込められていた。
「〝魔王〟ねその魔王とやらが圧倒的な力でコミュニティーを壊滅に追い込んだ、そういうことかしら」
「半分は正解ですよ、レディ。確かに魔王は強大な力を持つ修羅神仏であることがほと

んどです。
しかしそれだけでは正しくない。
魔王が恐れられるのはその力以上に、ある特権を持っているからです。
それが〝主催者権限〟。
これを持つものは、望まぬ相手であろうとも強制的にギフトゲームに参加させることができます。
魔王はこの特権を使って、コミュニティを強制的にギフトゲームに参加させ、コミュニティは……そのすべてを失ったのです」
ガルドは何所か平坦な口調で話した。
それは貶めるでもなく、楽しそうでもなく、淡々と嫌なことでも話しているかのようだった。
「なるほどね、大体わかったわ魔王というのが特権を振りかざし、ジン君のコミュニティをたたきつぶしたということがね」
「そうですレディ。神という物は生意気な人間が大好きですから。
力があればあるほどに愛し、愛しすぎた結果人間の方が耐えきれなくなって壊れてしまう。よくあることですよ」
ガルドは肩をすくめ、皮肉げに笑った。

「力を持ちすぎたがゆえに狙われた。
今では名も、旗印も、人材も失い、残されたものは瓦礫の山と化した広大な居住区画だけ。
コミュニティの形骸だけが残っている。無様な話ですよ、潔くコミュニティを解散しておけばまだやりようはあったでしょうに」
「それは……」
ジンが何か言いかけるが、ガルドが遮った。
「考えても見てください、名も旗も失ったコミュニティに何ができますか？　名も旗もないとなれば信用がない、いや存在していないことと同義、それでは商売もゲームの主催者もできません。
ならばゲームに参加する？　そんな力のある人材が名無しに集まるわけもありません。
だというのに、そこで縮こまっているジン君は過去にすがって現実を見ようとしない。
そもそもコミュニティの存続も黒ウサギに頼り切りで、自分で何かするわけでもない。
私はもう愚かとしか言うことができない」

ガルドはそう吐き捨てた。
ジンは何も否定しない、いやできなかった。
ガルドの言っていることは言い方に悪意はあれど、嘘は含まれていなかったからだ。
「なるほど、あなたの言うことはよくわかったわ。
あなたの言ってることも、おおむね事実なのでしょうね。
でも、あなたはなぜ私たちに懇切丁寧に教えてくれたのかしら？」
「簡単なことです、あなたたちを黒ウサギともども勧誘するためですよ」
「なっ！　いきなり何を言い出すんですか、ガルド＝カスパー！」
「テメェは黙ってろ！　……どうですか？　レディだけではなくそちらの方々も。無論、いきなり所属してもらおうとは思っていません。
３０日間の猶予期間の間じっくり検討くださって結構で……」
「結構よ。私はジン君のコミュニティで間に合ってるわ」
飛鳥の当然の言葉に、ガルドはもちろんジンも驚き呆けた。
話の流れ的にありえないような言葉だったからだ。
「そ、それは一体どういう……」
「わからないかしら？　私はジン君のコミュニティに所属すると言っているのよ。あなたたちはどうする？」

「私は別にどっちでも……私はこの世界に友達を作りに来ただけだから」
「あら、じゃあ私が友達一号に立候補するわ。あなたとは仲良くできそうだから」
「あ、じゃ僕も僕も。僕も友達って作ったことがなかったんだよね」
「えっと、私でいいの？」
「あなただからいいんじゃない、きっと面白いわ」
「面白いはいいことだ」
「……うん、いいよ。飛鳥も明彦も、とっても面白いから」
そう言って、耀は笑顔になった。
問題なのはこけにされたガルドだった。
テーブルに置いた手が力を入れすぎて喰い込んでしまうほどに激昂しているのが見て取れる。
「お話のところ申し訳ないが……説明をしていただけますか？」
「そうね、あなたの提示した野望は別に嫌いではないし、あなたの態度も似合わないという点を除けばそう悪いものじゃあなかったわ」
「では、なぜ？」
「ひとつは、私は約束された将来も、裕福な家もおよそ人が望みうる幸福を捨て去ってこの箱庭に来たの。

いまさら貧乏だからとかそう言う理由で所属する場所を選ぶ理由にはならないわ。
もうひとつはあなたの話の中で明らかにおかしかったところがあったから、かしら」
ガルドは顔色を変えた、自分の話を反芻するが嘘は一つも付いていないはずだ。
それはいったい何なのか、ゆっくりと飛鳥が説明しようとして、そこに明彦が自慢げに割り込んだ。
「それってあれでしょ、とっても大事でコミュニティーそのもといえる旗印を賭けたゲームなんてやる理由ないって話でしょ！」
明彦に言われ、ジンと耀も気がついた。
ガルドは旗を賭けてゲームをし連戦連勝していると言った。しかしそれは余程追いつめられたコミュニティーであるか、魔王の持つ主催者権限がなければありえない話なのだ。
それこそが魔王の恐れられるゆえんであるのだから、ガルドが主催者権限を持つはずがない。
これは明らかな矛盾だった。
明彦を飛鳥がじろりと睨んだが、明彦は首をかしげるだけだった。
気を取り直して飛鳥はガルドの方に視線を戻した。
「それで、説明してもらえるのかしら？」

「……なるほど、な」

さっきまでの怒りがまるで嘘であったかのように、冷静な声だった。

怒り狂うか暴れるか、そういった反応を予想していただけに飛鳥は驚きに目を見張った。

ガルドの顔には楽しげな笑みすら浮かんでいるではないか。

さっきまでとは全く違う、それは野獣の笑みだ。

ジンを除いた4人に緊張が走る。

さっきまでとは違う、そう感じたからだ。

「詫びるぜ、侮ってた。箱庭に来たばかりの全くの初心者であるとな。まさかそれだけで気がつくたぁさすがに予想外だった」

「……それはどうも」

「そこまでわかっているなら予想もつくんじゃあねぇか？　俺が何をやったのかをよ」

「そうね、可能性はいくつかあるわ、その中で周囲に知られない隠密性と、相手に強制させる確実性。

それらを併せ持つ方法……そうね、人質かしら？」

それは確認だった。

それに対してガルドは笑うだけで何も言わない。

言うまでもないだろうという態度だ。
「そ、それは明らかに犯罪です！」
「何のことだぁ？　俺は何にもしてないぜ」
ジンが叫ぶが、ガルドはまるで堪えていないかのように笑った。
そして暗に認めておきながら、挑発するようにそういったのだ。
人質を取っている以上、とられている方は何も証言することはできない。
故にこの自信だった。ガルドは遊んでいたのだ、面白そうな新人を前に油断していたといってもいい。
そう、ガルドは知らなかったのだ。目の前にいる少年少女が人類最高のギフト保持者だとは。

「あら、なら喋ってもらおうかしら。〝黙って私の質問に答えなさい〟」
次に飛鳥が放った言葉はさっきまでとはまったく違っていた。それは抗いがたい力に満ちた言葉だった。
言葉は見えざる矢のようにガルドを貫いた。
「あなたは人質を取って強制的に旗を賭けたゲームに相手コミュニティを参加させたわね？」

「ああ、ゲーム前に捕えて、終わった後も人質を取るのが一番手っ取り早いからな」
飛鳥の質問にガルドは素直にすらすら答えた。周りも驚いていたが、ガルド本人も驚いた顔をしている。
「人質はどこ?」
「本拠地で軟禁中だ、過不足なく生活している」
「それじゃあ…」
質問される前に、ガルドは飛び退いた。
しかし、飛鳥はそれを許さない。
「〝いいか席に着きについて黙っていなさい〟」
その言葉一つで、大男のガルドは席に戻る。
ガルド本人は額に青筋立てるほど抵抗しているようだが、動きがぎくしゃくするぐらいで全くの無駄であった。
そうと悟るとガルドは力を抜いて呆れたような顔をした。
「とりあえず言質は取ったけど、これで捕まえることはできるかしら」
「……難しいと思います、吸収したコミュニティから人質をとったり、脅迫して無理矢理ギフトゲームに参加させるのはもちろん犯罪です。ですが、裁かれる前に箱庭をの外に逃げ出せば裁きを受けることはないでしょう」

ある意味それも追放という形で刑罰になるかもしれない。
上を目指す野望を持った男が追放され夢破れるのなら十分に裁きが下ったといえるだろう。
「そう……それでもいいかもしれないわね」
そう言って飛鳥はパチンと指を鳴らした。
それが合図だったのだろう。ガルドを縛っていた不可視の力は消え去り、身体に自由が戻った。
ガルドは身体のコリをほぐすように腕をぐるぐると回したり、手を開いたり握ったりして調子を確かめ、異常がないことを確認した。
そして感心したように言った。
「相手を強制的に動かす言葉か。とんでもなくレアな能力だぜ。いいもん持ってるじゃねぇか」
「意外ね。逃げなくていいのかしら？」
「なあに、この話が街のすべての人間に知られたわけじゃあねぇ。ここでお前らをどうにかすりゃあいいだけの話よ」
ガルドとテーブルに着く5人の視線が交錯する。
ジンを以外は暴力に訴えるならやぶさかではないという態度だった。

しかし、ガルドは動かない。

「言葉一つで身動きできなくなるのに実力行使に出るかよ。そっちの３人も〝出来る〟みたいだしな」

耀と明彦と都をチラリと見る。

三人ともガルドが動けばそれぞれがそれを阻止するために動くだろうし、それができるだけの実力もありそうだ。

ガルドが暴れてもおそらく押さえつけられるだろう。

戦力差を理解し、それでも、いや、だからこそガルドは不敵に笑った。

危機であるがゆえに面白い、ガルドは久しく感じていなかった闘志を燃やしていいた。

そしてこう言ったのだ。

「なあ、ゲームをしようぜ。俺とお前らで、ギフトゲームをよ」

4．ノリと勢いが大事

「ギフトゲーム？　やる理由がないでしょう？」
ガルドのその一言に飛鳥は怪訝な顔をした。
「そうか？　だがそれを言うなら俺に罰を与えようということにも大した意味はなはずだがな」
「あいにく犯罪者を捕まえるのに大した理由は必要ありません」
「ほー、だがそれで何が手に入る？　名誉か？　満足感か？　まあそれも悪くはないだろう。
だが、俺とギフトゲームをするほうが楽しいと思うがね」
ピクリと、テーブルに座っている3人の顔色が変わった。
「何もタダでゲームに参加しろとは言ないさ、勝敗の是非にかかわらず人質は解放しよう。なんならこの後すぐに開放してもいい。
さらにお前たちが勝ったら俺の持っているものなら何でも一つ差し出してやる。もちろん一人一つだ。
どうだこれでもやらないか？」

「……」

破格の条件だ。しかし飛鳥は油断できない。この男が何を考えているのかわからないからだ。

（力を使って無理矢理喋らせようかしら？）

一瞬そんな誘惑にかられ、しかし飛鳥はためらった。

この力を嫌悪しておきながら、同時に頼ってしまう自分の弱さが嫌だったからだ。

飛鳥はこの世界に来る前は財閥の令嬢として何不自由しない生活を送っていた。

金に困るなどということはなく、毎日お抱えのシェフが作った豪華な料理を食べ、広い館に使用人に囲まれて育ち、将来も約束されていた。

だが、飛鳥に宿った力は人を支配してしまう力だ。

相手が誰であろうと飛鳥の言葉には逆らえない。

それはつまり飛鳥にとっての人間関係は望まなくとも一方的な支配にしかなりえなかったのだ。

そんな不毛な人間関係に嫌気がさしていたから飛鳥はこの世界へ来ることを選んだのだ。

だというのに、いくら敵であろうと交渉してきている相手を力を使って支配して一体何が楽しいというのか。

少なくとも相手まっとうに交渉している。
力を使うことは飛鳥のプライドが許さなかった。
飛鳥はあえて力を使わずに、この交渉に臨むことを決めた。
「いくつか、質問してもいいかしら？」
「もちろんいいとも、ルールの確認は重要だからな」
その問いにガルドは内心この交渉での勝利を確信して、笑いながらうなずいた。
「ゲームの内容はあなたが決めるのかしら？」
「そうなるな、お前らが主催者としてギフトゲームを開催できるっていうならそれでもいいが」
飛鳥はチラリとジンに視線を送るが、みられたジンは慌てたように首を横に振った。
開催は無理ということだろう。
「場所は？」
「普通ならそれ用の区画があるが、今回は俺のコミュニティが支配してる区画を考えてるところだ」
「日時」
「時間をかけて時間稼ぎと思われても迷惑だ。明日だ、明日の正午にスタートだ」
「なら、……私たちが負けたときは何を支払えばいいのかしら？」

その問いに、ガルドはちょっと不意を突かれたように呆けた顔をした。
しかしすぐにいたずらを思いついたようにあくどい笑みを浮かべてこういったのだ。
「何でもいいぜ？　何せこっちがお願いする立場だからなぁ、なんならタダで戦うんでもいいんだぜぇ？
まあ、リスクがないゲームがたのしいっていうならいいと思うぜぇ？」
それは、明らかな挑発だった。
ジンでもわかるほどわかりやすい挑発である。
そもそも、こちらとしてはこのギフトゲームに参加する必要性は全くない。
だからジンは、四人がゲームに乗ることはあるまいと振り返り、そして固まった。
「そう、面白いわ。その勝負受けてあげるわ…」
「私も…その勝負受ける」
やる気満々な二人。
「なんだか面白そうだね。もちろん参加するとも！」
そしてもっと乗り乗りな明彦。
「……はぁ」
一人ため息をつく都を除いて思いっきり乗り気だったからだ。
ガルドはそれを見てますます笑みを深めた。

そしてさらに挑発を重ねたのだ。

「それじゃあ、お前たちが負けたとき何を賭ける？　お前ら来たばっかじゃねぇか、掛けられるものがあるのか？　俺のやったことを黙ってるなんてのはやめてくれよ？　どうせ人質解放すりゃあ黙ってても伝わるんだからよぉ」

それに対して三人は口をそろえてこういった。

「あるわ」

「うん、ある」

「あるある、とびっきりのが！」

「……はぁ」

「「私たちは自分自身を賭ける！」」

そうして、ジンと都をおいてきぼりにしながらフォレス・ガロ　対　問題児によるギフトゲームが開催されることとなったのだった。

時間が過ぎ、とっぷりと陽が暮れるころ黒ウサギと十六夜が噴水広場にやって来た。
そして当然事情を説明することになった。
「どーして私がいない間にそんな大問題を起こしているんですか～!!」
話を聞いた黒ウサギは当然のごとく驚き、次に怒り、そして叫んだ。それはもう大絶叫だった。
しかし怒られる三人はまるで堪えていない。息を合わせてこういった。
「「ノリと勢いでやった、別に後悔はしていない！」」
「お馬鹿お馬鹿お馬鹿!!」
何所からか取り出したハリセンで三人の頭をぺしぺしと叩く黒ウサギ。
そこに十六夜が投げやりに言った。
「まあ受けたもんは仕方ないだろ、要は勝てばいいわけだし」
「そ、そうです！　蛇神を倒せる十六夜さんが出れば生半可なゲームなどちょちょいの
「あ？　俺はでねぇぞ」ちょい……え？」
振り返った黒ウサギは救世主を見つけたかのように喜色満面の笑みを浮かべ、言い終えるより早く十六夜の一言にうち砕かれた。

追い打ちをかけるように飛鳥もうなずいく。
「とうぜんね、私たち買ったゲームなのだから、このゲームに参加するのは私たちよ」
「そうだそうだー、一人だけ世界の果て見てきたんだから先にギフトゲームをさせてもらうんだ！」
「ふっ、残念だったな。俺はもうギフトゲームに勝利してきたぜ」
「なん、だと…」
「抜け駆け……」
「なんとでも言えよ、早い者勝ちさ」
「……はぁ」
問題児同士で仲良く話す横で、黒ウサギは絶望的な気分で地面に手をつき打ちひしがれていた。
「どうして、こんなことに」
「ごめん、黒ウサギ。僕がしっかりしていいれば」
「いいえ、ジン坊ちゃん。黒ウサギも浮かれていたのかもしれません。
しかし、そういったことを差し引いてもこのギフトゲームは問題だらけです。
本来戦うまでもなく勝っていた物をギフトゲームに参加させることで対等にまで引き上げ、挑発でとんでもないチップを賭けることになってしまいました。

ここまでのことをやるとなると、聞き及ぶガルドの噂は全く当てになりません」
「まーいいじゃんいいじゃん、ぐちぐち言うもんじゃないよ。ぶっつけ本番でも何でも勝てばいいんでしょ」
「しかし！　この〝誓約書類〟には内容が書かれていません！　一体どんなゲームとなるか予測ができません！　相手に有利なルールで戦うことになるんですよ」
「まー知らなかったしねぇ？　その点については次からはしっかりするよ。でもね、今回はもう言うだけ無駄。失敗は次に生かし、今は明日の準備をしようよ」
「う、それはそうですが……はあ、わかりました。ここでこうしていたも仕方がありません。
とにかく明日に向けて出来ることをしましょう」
むん、と気力を奮い起こし、黒ウサギは立ち上がった。
「みなさん、そろそろ行きましょう。この後にも皆さんを歓迎するためにいろいろと予定していたのですが。
事件が重なり今回は延期となってしまいました。ですが、後日改めて歓迎させていただきますので」
申し訳なさそうに黒ウサギはそういったが、すでに裏事情を知っているため騒ぐようなことはなかった。

「その必要はないわ、コミュニティの財政は厳しいのでしょう？」
「えっ！　ど、どうしてそのことを？」
「ガルドが丁寧に説明してくれたよ？」
「そ、そうですか……。
　皆さん申し訳ありません、いくら必死だったとしても皆さんを騙すような真似をして」
　黒ウサギはできる限りの誠意をこめて深々と頭を下げた。
「いいわ、別に組織の大きさなんてどうでもいいもの、逆に小さいからこそ大きくする事が楽しみだわ」
「うん、ないならないでやりようはあるし。騙されたってほどでもないかな？」
「明彦さまがそうおっしゃられるのであれば私からは何も」
「私も…別に怒ってないコミュニティがどうのとかは気にしない。あ、でも」
　耀は少し迷うようなそぶりで言葉を切った。
「もし何か要望がございました出来うる限りのことをさせていただきます。
　だから何でもおっしゃってください」
「そう？　なら、私は毎日三食お風呂付の生活がしたいなって……」
「お風呂、ですか……」

ジンの表情は硬くなった。今コミュニティに水源は存在しておらず、枯れた水路があるだけだ。
そのため生活用水は数キロ離れた川から汲んでくる必要がある。
当然大量に汲んでくることはできず、お風呂は今のコミュニティではとても贅沢な要望だ。
ジンのその表情から耀も事情を察っして、すぐに取り消そうとした。
しかし耀が何か言うよりも早く黒ウサギがうれしそうに梱包された木の苗を掲げた。
「大丈夫です！　十六夜さんがこんなに大きな水樹を手に入れてくれましたから。これでわざわざ水を汲みに行かなくても済みます！」
黒ウサギはきゃっほーいと踊りだしながらそう言った。
それを聞いてジンも顔が明るくなった。
これでもう子供たちに延々バケツリレーをさせる必要もなくなったからだ。
「どうやら問題は解決したみたいね、今日は湖に落ちる羽目になったからお風呂には絶対に入りたかったから安心したわ」
「それには同意するぜ、なんせさっき二度目の水浴びをする羽目になったからな」
「水浴びかぁ、うーん楽しみ」
「それじゃあこのまま帰る？」

「ちょっとお持ちください、ジン坊ちゃんは先に風呂の支度をお願いいたします。他の皆様には先に〝サウザンドアイズ〟でギフトの鑑定をしてもらいましょう」
「さうざんどあいず？」
「ＹＥＳ！　この箱庭において東西南北上層からかそうまでほぼ全域に支店を持つ巨大商業ギルドです。
　所属するものは特殊な〝瞳〟のギフトを持っている複合コミュニティです」
「ギフトを鑑定って、する必要ある？」
「ＹＥＳ！　ギフトを鑑定することによって自分の力を正しく把握することができます。自分の力がどのようなものかを正しく理解した方が出せる力も大きくなります。皆さんも自分の力が何所から来たのか気になりませんか？」
「んー、まあ」
　みんな微妙な顔ではあるが、拒否はしなかった。一応気になりはしているのだろう。
　そのままジンとはわかれ、６人は水路の走る表通りをぞろぞろと歩きだした。
　道のわきには街路樹として植えてある、赤い樹皮の木が薄紅色の花を満開に咲かせている。
「綺麗だなぁ」
「そうね、桜…ではないわね、花弁の数も違うし何より木の幹がこんなに赤い。そもそも

真夏に桜が咲いているはずもないわね」
「ん？　まだ初夏だぜ、根性ある桜が少しぐらい残っててもおかしくはないだろ」
「……？　もう秋だったよ？」
「いや、そもそも季節とか言われてもそんなのなかったし」
　話がかみ合わない。
「おい、黒ウサギ。こりゃどういうことだ？」
「皆さんはそれぞれ異なる世界から箱庭にやって来たのデス。ですので歴史や文化、風土、時間軸すら違っているはずです」
「パラレルワールドってやつか」
「近いですが、正確には立体交差並行世界論と呼ばれるものです。これは説明すると長くなりますのでまたの機会に。着きましたよ」
　そう言って黒ウサギが振りかえったのは向かい合う二人の女神の紋章が描かれた旗を掲げる店だ。
　ここがサウザンドアイズの店なのだろう。
　名前とは違って和風な店構えとなっている。
　しかし折悪く、入口を見るとちょうど割烹着姿の女性が暖簾を下げようとしていた。
「ちょ、ちょっとまったー!!」

慌てて黒ウサギはその駿足で滑り込みをかける。
「待ったは無しですお客様、うちは時間外営業は行っておりません」
「そんな殺生な！」
しかし、女性従業員は冷静に対応する。
「ごねるようでしたら出禁にします」
「なっ！　いくらなんでもお客を舐めすぎですよ！」
黒ウサギも簡単には引こうとしない。
従業員はそんな黒ウサギを冷めた目で睨む。
「……わかりました、入店許可をうかがってまいりますのでコミュニティのお名前をお聞きしても？」
「えっ、その…」
「〝ノーネーム〟っていうんだが？」
言い淀む黒ウサギの代わりに十六夜がこたえる。
「ではどちらの〝ノーネーム〟でございましょうか、旗印をお見せいただけますか？」
これにはさすがに十六夜も黙った。
そして痛感する。〝名〟も〝旗印〟もないとはつまりこういうことなのだと。
「ご理解いただけたようでしたらどうぞお引き取りください」

そう言って従業員は中に入ろうとして扉を開けた。
「黒ウサギいいいいいぃいいぃいぃい!!!」
「え？　ひゃわあああああああああ!!!‼!」
そして中から飛び出してきた何かが狙い過たず黒ウサギに突撃し、その勢いのままもみくちゃに水路へと着水した。
「………」
従業員はそれが誰であるかいち早く気が付き、そして頭痛をこらえるように頭を押さえた。
「なんだ？　この店じゃああいうサービスがあるのか？　なら俺は別バージョンを頼むぜ」
「ありません」
「何なら金も出すぜ」
「やりません」
「にょほほほほ、久しぶりではないか黒ウサギ。相変わらず柔っこいのう、むほほほほ」
「し、白夜叉様!?　ちょ、おやめください。あ、きゃあ!」
水路の方からやけに幼い声と黒ウサギのやけにつやっぽい声が聞こえてくる。
どうやらあの幼女は見た目似合わぬセクハラまがいのこと、というよりも思いっき

りセクハラを黒ウサギにかましているようだった。
「よいではないか、よいではないか！」
「よくありません！」
ついに我慢しきれなくなった黒ウサギは幼女を思いっきり弾き飛ばした。
空中を物理的に飛行してくるそれは、ここにいる中で一番背の低い明彦よりもさらに小さく、スカート付きにに改造された和服に身を包む、真っ白な髪と金色の目が特徴の幼い少女だった。
少女が飛ぶ先は十六夜。
それに気がついた十六夜は、手で受け止めるでもなく、よけるでもなく、飛んでくる幼女を特に遠慮もなく足で蹴り上げるようにして受け止めた。
「おりゃ」
「ぐぼあっ！」
口から悲鳴を上げる少女、しかし大したダメージはないのかすぐに起き上がって来た。
「お、おんし飛んでくる幼女を足で受け止めるとは何様じゃ！」
「十六夜様だぜ和服ロリ」
蹴りをくらっておきながら怪我もなく起き上る少女は怒って十六夜に詰め寄った。

それを全く気にせずヤハハと笑う十六夜。
どちらも普通の感性ではなかった。
「えっと、この店の人かしら」
「おうとも、私は〝サウザンドアイズ〟で幹部をしている白夜叉だよ。黒ウサギを連れ立ってるのを見るに新しく来た黒ウサギの同士かの？」
「そうですが、白夜叉様は少し自嘲してくださいい～」
びしょびしょに濡れた黒ウサギが服を絞りながら戻ってきた。そして大きなため息をつく。
「まさか私まで濡れることになるなんて…」
「まさに因果応報」
「黒ウサギがかわい過ぎるのがいけないのだ！」
「少しは悪いと思ってください！」
わははと悪う白夜叉は全く悪びれない。快楽主義な十六夜に似た性格のようだ。
「まあ、濡れてしまったものはしょうがない、中に入って乾かすといい」
「オーナー、彼らは〝ノーネーム〟ですよ。規定では…」
「それをわかっていながら名を問うお前の意地悪の詫びじゃ。身元は私が保証するし責任もとる。入れてやれ」

従業員はむっとした顔をするが、しぶしぶと引き下がって扉を開いた。
「話は中で聞こう、入るといい」

通された部屋は掛け軸や調度品の置かれた畳敷きの完全な和室だった。
広々としており、香が焚かれている。風に乗って心地の良い香りが鼻をくすぐった。
「さて、もう一度ちゃんと自己紹介をして置くかの。私の名は白夜叉。四桁の門、三三四五外門に本拠を構えておる。〝サウザンドアイズ〟では幹部ををよっておるが、黒ウサギとは深い深ーい関係でのう、そう、あんなことやこんなことまで…」「し、してませんよそんなこと！　真面目に話してください！」
「あの」
耀が控えめに手を上げた。
「ジン君も言ってたけど、外門って何？」
「簡単に言うなら外門とは箱庭における住所のようなもです。数字が若いほど、中心に近くて力のあるコミュニティの証になるんです」
そう言って立ち直った黒ウサギは宙に指先から放つ光の線で同心円を七重に描き、？を書くように区分けする。

「超巨大玉ねぎ？」
「いや、この形はバームクーヘンだろ」
「バームクーヘンて何？」
「お菓子です」
「うむ、甘くておいしいぞ。まあその例えならバームクーヘンじゃろう。今いるここは七桁の外門は一番外側、方位で言うなら東側。すぐ近くが世界の果てとなっておる。あそこには強力な幻獣が住んでおる――――――例えばそこの水樹の元の持ち主とかがの」
　白夜叉はそう言いながら面白そうに水樹を指差した。
「それで誰がどんなゲームであれを倒したのじゃ？　」
「こちらの十六夜さんがなんと素手の一撃で叩きのめしたのです！」
　白夜叉に聞かれ、黒ウサギが十六夜を指してうれしそうに言った。白夜叉もそれには驚いた顔をする。
「なんとこの童が直接あれを倒したのか？　神格を持っているようには見えんが……いやはやなかなか辺りを引いたようじゃの」
「質問。神格って？　持ってると何か違うの？」
　明彦が手を上げた。

「うむ、違う。神格はそれを持つものの種族としての格を上げるのじゃが、それに伴いギフトや身体能力などが大幅に強化される。上層階では必須といわれるギフトの一つじゃな」
「へぇ……どうも」
「よいよい、何でも質問するとよいぞ」
「といいますか、白夜叉様はこの水樹の持ち主だった方をご存じなのですか？」
「当然じゃ、そもそもあれに神格を与えたのは私じゃからのう」
　呵々と笑い無い胸を張る白夜叉。
　しかしそれを聞いた問題児たちはその目を物騒に光らせた。
「へぇ、そいつはつまりあの蛇よりお前は強いんだよな」
「当然じゃな、私は東の〝階層支配者〟だぞ？　この東区画の四桁以下で私より強い者はおらん」
「あら……それはつまりここであなたを倒せば私たちが最強のコミュニティということとかしら」
「そうなるのう」
「そりゃあラッキーだ。こんなに早く会えるとはな」
　物騒な目をして、三人が立ち上がる。剣呑な雰囲気を放つ三人に、しかし白夜叉は余

裕の笑みを崩さない。
それこそほほえましいものを見るように笑っている。
「なかなか面白い童たちだ。私にギフトゲームを挑む気か?」
「え、ちょ、ちょっとお待ち下さい御三方!」
ようやく三人の戦意に気がついた黒ウサギが止めようと腰を浮かすが、白夜叉がそれを止めた。
「良いではないか黒ウサギ、元気があって。それはそうとそこな二人はやらんのか?」
そういって二人に扇子を向ける。見れば明彦と都は二人とも立ち上がっていなかった。
「遊びならやるよ」
「私は明彦様に従います」
そう言って肩をすくめる。
「ふむ、賢明だ。さてお主ら、私とゲームをするのならその前に確認することがある」
そう言って白夜叉は袖から二人の女神の紋章が描かれたカードを取り出す。
その動作に身構える三人。
「お主らの望むのは〝試練〟か、それとも〝決闘〟か?」

白夜叉のその言葉とともにカードは眩く輝き、白い光に七人を飲み込まれたのだった。

5．白き夜の魔王

世界が光に塗りつぶされ、風景が次々と切り替わっていく。
それは黒々とした広大な森であり、それは熱波の吹きすさぶ砂漠であり、それは歴史を感じさせる古城と城下町であった。
様々な世界が過ぎ去っていき、やがて終点にたどり着く。
「おわっ！」
「な、なんなの！」
「びっくり」
「すごいなぁ、箱庭って」
眠りから覚醒する時のような一瞬の浮遊感が過ぎ去ると、そこに見える光景は一変していた。
地平線の彼方まで雪と氷で覆われた大地、凍結した湖とその向こうに見える白い山脈。
空には薄く雲がかかっているが、驚くべきことにその向こうに見える太陽は目に見える速度で水平に動いているではないか！

「なんだ、こりゃあ」
茫然としたように十六夜は呟いた。
「これは私が持つ遊戯盤の一つじゃ。
さて、今一度問おうか。おんしらがこの〝白き夜の魔王〟に望むのは、〝試練〟への挑戦か？　それとも対等な〝決闘〟か？」
そう言った白夜叉は強烈な凄味を込めて三人を睨みつけた。
「なるほど、この太陽が沈むことのないこの白夜の世界、これはお前を表しているんだな」
十六夜は絞り出すように言った。
「如何にも。このゲーム盤は太陽と白夜の星霊である私をモチーフに作った物じゃ」
そう言って白夜叉は両手を掲げる。すると空の薄雲が晴れ太陽が姿を現した。
その光景は白夜叉が天候さえ左右することができる力があることを知らしめた。
「して如何する？　〝試練〟ならば何か適当なものを用意しよう。しかし〝決闘〟ならば、私も魔王として、全力を持って叩き潰してやろう」
その言葉にさすがの三人もすぐには答えられなかった。
十六夜ですら冷や汗をかいたほどだ。
睨みあってはいる物の、三人とももうさっきまでの戦意は消えていた。

やがて十六夜が大きくため息をつき両手を上げる。
「降参だ、こんなとんでもないもんを持ってるとは大したもんだ、負けたよ」
「ほう、それは〝決闘〟ではなく〝試練〟を受けるということかの？」
「ああ、仕方がねえからな、お前に試されてやるよ」
「…私も仕方がないからそうするわ」
「以下同文」
仕方ないとばかりに三人は負けを認めた。跳ねっ返りの反骨精神も今挑むにはさすがに無謀であると判断したのだろう。
白夜叉も威圧するのをやめ再び笑みを浮かべた。
「ふむふむ、捻くれておるのう。そっちの二人もそれで良いか？」
「問題無いでーす」
「了解しました」
闘争の気配が遠ざかっていくのを感じ黒ウサギは安心したように息を吐いた。
「もう！　いくらなんでも白夜叉様に喧嘩を売るなんて無謀すぎますよ！　白夜叉様も白夜叉様です。そんなに簡単に受けるだなんて言わないでください！　そもそも白夜叉様が魔王だったのはもう何千年も昔の話じゃないですか！」
「なんだ、元・魔王かよ」

「はて、どうだったかのう？」
悪びれることを知らない白夜叉に黒ウサギは脱力する。
その時、凍てつく大気に獣の咆哮のような、鳥の甲高い鳴き声のような不思議な声が響いた。
それにまず反応したのは耀だった。
「何、今の声。聞いたことがない」
動物に親しむ耀は大抵の生き物の鳴き声を知っている。しかし、今聞いた声は今まで聞いたどんな生物とも違っていた。
「ふむ、あ奴か、丁度よい」
白夜叉は山に向かって軽く手招きをした。
それに応えるように空を飛んで山から何かが近づいてくる。かなりの早さだ。
豆粒大の影から、だんだんとその姿が見えてくる。
それは普通の動物ではなかった。
体長は5メートルを超えるその巨体。背には二枚の翼を持ち、その力強い後ろ脚は獅子のもの、鋭い鉤爪の付いた前足は鳥のもの。眼光鋭いその頭は鷲のものである。
それは伝説にも登場する幻の生物だった。
耀は感嘆とともにその名を呼んだ。

「〝鷲獅子（グリフォン）〟…！」

風のごとく素早く疾駆し鷲獅子（グリフォン）は白夜叉の隣に静かに着地し一礼した。

どうやら礼儀も心得ているらしい。

「うむ、こやつこそ〝知恵〟〝勇気〟〝力〟を兼ね備えたギフトゲームを代表する幻獣鷲獅子（グリフォン）である。おんしらにはこの鷲獅子（グリフォン）を相手に〝知恵〟〝勇気〟〝力〟のどれかで競い合いグリフォンの背に跨って湖畔を舞うことができればクリアという事にしようか」

そう言って白夜叉はまた向かい合う二人の女神の紋章が描かれたカードを取り出した。

カードは一瞬光に包まれ、虚空から〝主催者権限〟にのみ許される輝く羊皮紙を召喚した。

その羊皮紙に、白夜叉はその白い指でさらさらと文章を書き連ねていく。

『ギフトゲーム名　〝鷲獅子の手綱〟

プレイヤー一覧　逆廻　十六夜

久遠　飛鳥

春日部　耀

千宮　明彦

都

クリア条件　鷲獅子(グリフォン)の背に跨り、湖畔を舞う。
クリア方法　〝力〟〝知恵〟〝勇気〟の何れかでグリフォンに認められる。
敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。
宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

〝サウザンドアイズ〟印』

上記のように書かれた羊皮紙を受け取り内容を確認したところで、誰よりも早く手を上げたのは耀だった。

「私がやる！」

比較的おとなしい雰囲気だったが、なぜだか今はキラキラと眼を輝かしている。

そして並々ならぬ視線を鷲獅子(グリフォン)にそそいでいた。

もしかしたら何か思い入れがあるのかもしれない。

「大丈夫？」

「私がやる！」

「えっと、春日部さん？」
「私がやる!!」
「駄目だなこりゃ」
「私がやる!!」
「わかったわかった、お前に任せる。行ってこいよ」
「気をつけてね」
「うん、頑張る！」
何を言ってもやるとしか言わない耀に、さすがに無粋であると考えたのだろう。
他に手を上げるものはいなかった。
「では決まりじゃのう」
耀はゆっくりと警戒されないよう歩いて鷲獅子（グリフォン）に近付く。
そして少し離れたところで立ち止まり、話しかけた。
「えっと、はじめまして、私の名前は春日部耀です」
『!?』
鷲獅子（グリフォン）がビクッと跳ねた。
おそらく話しかけられて驚いたのだろう。
これで耀のギフトは鷲獅子（グリフォン）のような幻獣にも通用することが証明された。

確実に難易度は下がった、後はどう話を持っていくかが問題である。
扇子を開いて隠した下で、白夜叉も面白そうな顔をした。
「あなたの誇りを賭けて、私と勝負してくれませんか？」
『何……？』
鷲獅子（グリフォン）は誇りを重んじる。
その鷲獅子（グリフォン）に誇りを賭けろとは挑発以外の何物でもなかった。
『それはその言葉の意味を知った上での発言か？』
「はい、あなたが私を背に乗せこの湖を一周し、ふり落せなかったらあなたの勝ち、ゴールまで乗っていられたら私の勝ち。どうですか？」
耀の提示したゲーム内容を吟味し、問題なしと判断した鷲獅子（グリフォン）は了承した。
『なるほど、確かに小娘一人ふり落せなければ私の誇りも地に落ちるだろう。だがお前が私に誇りを賭けさせるのなら、お前は一体何を賭ける？』
「私の命を」
即答だった。その答えに問いかけた鷲獅子（グリフォン）はも見たいた飛鳥と黒ウサギも驚いた。
「何を言っているの春日部さん！」
「そうです、いくらなんでもそれは…」
「いいの、やらせて」

耀は周りが思うよりも強い覚悟でこのゲームに参加していた。
それを感じ取り、十六夜と白夜叉が外野を止める。
「下がっておれ、これはあの娘が切りだした話しぞ」
「ああ、口出しするのは無粋だぜ」
「ですが！」
「大丈夫、勝つよ」
耀はほんのちょっぴりの笑顔を黒ウサギに向ける。
その笑顔に、黒ウサギは何も言えなくなった。耀が勝つことを疑いもしない本気の眼をしていたからだ。
『では来るがよい。鷲獅子（グリフォン）の疾走、見事乗りこなしてみせるがよい』
耀が鷲獅子（グリフォン）の背に乗る。
視界が高くなり、鷲獅子（グリフォン）はの体温が肌で感じられた。
そっとその見事な毛並みをなでて、耀はささやくようにつぶやいた。
「……私、あなたの背に乗るのが夢だったんだ」
『……そうか』
そして、白夜叉の合図とともにゲームが始まった。
鷲獅子（グリフォン）の飛行は実際に羽をはばたかせて飛んでいるわけではない。

その身に宿る風を操るギフトの恩恵で、大気を踏みしめて空中を駆けているのだ。
それに気が付き、耀は歓声を上げた。
「すごい！　あなたは風を踏みしめて走っている！」
しかしやがて、レースは中盤に差し掛かる。
森林を超え、次に通るのは山脈だ。ここで問題となるのは寒さだ。もともと寒いこの世界だが山の上となればさらに寒い、そんな中を超スピードで駆け抜ければ氷点下のはるか下の極寒の冷たさとなる。
序盤は会話をする余裕があった耀も、本気を出した鷲獅子（グリフォン）の疾走と猛烈な寒さに襲われその余裕は失われる。
しかし鷲獅子（グリフォン）が急降下や急旋回を繰り返しても耀は決して手を放そうとしない。
やがて元の湖畔へとたどり着き、耀は鷲獅子（グリフォン）の背に乗ったままゴールした。
だが耀はそこで気を緩めたのかするりと鷲獅子（グリフォン）の背から落ちてしまう。
周囲が騒然となり、黒ウサギが抱きとめようと走り出そうとして、十六夜に止められる。
「は、離してください！」
「まだだ、まだ終わってない」
その間にも耀は落下し続けていく。

そのほんの短い時間の中で、耀は鷲獅子（グリフォン）の疾走で味わった感覚を再現していた。
（空気を、風を掴み、絡め取って踏みしめる、そうだ…こんな、感じ）
耀は足を下に向け、中空に一歩を踏み出した。
その一歩で、耀の身体が浮き上がる。
次の一歩を踏み出し、次にまた次のと繰り返しついには一同の元へ無事にたどり着いた。
その光景に白夜叉すら絶句した。
飛べるそぶりを見せなかった耀がいきなり空を歩いて来たのだ。
それだけならまだしも、耀が行ったのは鷲獅子（グリフォン）の飛ぶ方法と同じものだったのだ。
驚かない方が無理がある。
そんな中、唯一驚いていない十六夜が耀に近寄った。
「やっぱりお前のギフトって生物の特性を手に入れるものだったんだな」
「ちがう、これは友達になった証し。でも、いつ気づいたの？」
「最初お前が「風下に立たれたらわかる」って言った時に。普通の人間ならそんなことはできない、だからギフトの恩恵だろうと考えた。そこからコミュニケーション能力だけじゃない、他種の特性を手に入れたんじゃないかと推察したんだ。ま、それだけじゃなさそうだが」

十六夜は興味津々な顔で耀を見たが、耀はふいっと十六夜を避け、よって来た三毛猫を抱き上げて何事かを話した。
そこに鷲獅子（グリフォン）と白夜叉がよって来た。
『見事だ勇者よ、そのギフトは私が勝利した証として使ってくれ』
「うん、ありがとう。大切にする」
「うむ、このゲームはお主の勝利じゃな。……ところで、おんしが使ったあのギフト。あれは先天的なものか？」
「ううん。彫刻家だった父さんからもらった木彫りの力」
そう言ってようは木彫りのペンダントを取り出した。
それを手に取り白夜叉はじっくりと鑑定する。飛鳥と十六夜も興味深そうに覗き込んだ。
「ほほう、これは……材質は楠の神木かの、神格は失われておるようだがこの複雑な幾何学模様と中心の空白…これはもしや。のう、もしかして父君には生物学者の知り合いだおらんかったか？」
「ん、母さんがそうだった」
「なるほど、生物学者ってことはやっぱりこれは生物の系統樹を現してるんだな？」
「そんなことを言ってた気がする」

耀はそこらへんの意味はさっぱり忘れていたようだった。
「素晴らしい！　これがもし人造なら作った人間はまさに神業ともいえる腕の持ち主じゃ。
系統樹を己の感性と技量で構築し、此処まで完璧に近いものを作り上げるとは。箱庭でもこれほどの名品にはなかなかお目にかかれんぞ！　もしよかったら譲ってほしいくらいだ」
キラキラと眼を輝かせ耀に詰め寄る白夜叉。
「だめ」
しかし耀はすげなく断り白夜叉から木彫りを取り返し首にかけなおす。
白夜叉はひどくうらやましそうにそれを眺めていたが、一つため息を吐いてあきらめた。
明彦はその輪には入らず、たった今見た感動を形にする作業に入っていた。
白い雪を都とともにものすごい勢いで積み上げ小山とするとそれを道具も何も使わず素手で形を整えていく。
やがて輪郭が変化し、それはやがて鷲獅子（グリフォン）の精巧な雪像となっていった。
明彦の手が動くと、雪像の表面が変化し羽の一枚一枚まで作り込まれ込まれていく。
片足を上げ、今にも飛び出しそうな躍動感を持った迫力のある雪像を眺め、明彦は一

息ついた。
　所要時間五分の早技であった。
「完成っ」
『ふむ、うまくできているな』
　自分そっくりの雪像に、鷲獅子（グリフォン）が興味深そうに近寄って来た。
　明彦は鷲獅子（グリフォン）が何を言っているのはわからなかったが、なんとなくほめている気がしたのでにっこりと笑った。
「あー、そこの二人ちょっとこっちに来てくれるか？」
「？　はーい」
「……」
　白夜叉に手招きされ近寄ると、何やら問題児三人の手にはそれぞれ色の違うカードが握られていた。
「なにそれ？　ポイントカード？」
「違います！　ギフトカードです！」
「ふーん、ぎふとかーど…？」
　全くわかってないが明彦は納得したようにうなずいた。
「とりあえず、これが今回の賞品でお主らの分じゃ」

白夜叉から真っ白で何も書かれていないギフトカードを手渡される。
明彦と都が手に取ると、突然カードは光に包まれその姿を変化させた。
明彦のギフトカードは、砂漠の砂のようなデザートイエローに〝創造者の御手（クリエイト・ワーカー）〟
都のギフトカードは黒曜石のような光を照り返す漆黒の黒に星のような小さな光が輝き、白い字で〝深淵の欠片（ダーク・スター）〟と書かれていた。
「…なにこれ？」
「……少々格好をつけすぎではないでしょうか？」
「文句をつけるでない、それがお主らに宿るギフトの名前だ。鑑定をする代わりには少々高いがまあ黒ウサギのコミュニティ復興の前祝いだ。大事にするのだぞ？」
「ふーん」
明彦はギフトカードを光にかざしたり手触りを確かめたりしていたが。やがて両手で持ってぐにっと二つに折り曲げようとした。
「ぎゃー！　何をしてるんですか！」
「いや、つい」
その現場を目撃した黒ウサギはハリセン片手に叫んだ。
明彦は特に悪びれずギフトカードはそのままポケットにしまった。
「まあ、そんなに簡単には壊れんがな、あまり無茶をするではないぞ」

「りょーかい」

「ギフトカードは正式名称を〝ラプラスの紙片〟といい、全知の一端でじゃ。ギフトカードは持ち主の魂に宿るギフトの名称を表し、道具として具現化したギフトなどを収納することもできる優れものじゃ。

鑑定をするほどでもないが名称を見れば大体の事がわかるじゃろう」

「へぇ、じゃあ俺のは例外ってやつなんだな」

十六夜の言葉に白夜叉は振り返る。

十六夜が手に持つ持つギフトカードをの覗き込むと、そこには〝正体不明（コード・アンノウン）〟と書かれていた。

「馬鹿な、ありえん」

白夜叉は心底驚いた顔をした。

全治の一端であるギフトカードがわからないなどという回答を出したのだから当然だ。

十六夜は笑っているが白夜叉はめまぐるしく考えを回転させていた。

（全知の一端である〝ラプラスの紙片〟の紙片がわからないことがあるなどありえん、となれば故障か、ギフトそのものが何らかの作用で引き起こしたと考えるべきだ。…この小僧は蛇神を素手で倒したといったが嵐をおこす蛇神を倒す身体能力となれば並み

のものではない、それに加えて〝ラプラスの紙片〟に誤作動を起こさせるとは一体……？）

その時白夜叉の脳裏にありえないような可能性が一つ浮かんだ。

（ギフトの無効化？　いやいや、ありえん）

ギフトの無効化、単一のギフトを対象にしたものであれば箱庭でも珍しくない。だが十六夜のギフトは望むまでもなく〝ラプラスの紙片〟を無効化した。つまりそれは単一の対象を無効化するものではなく、どんなギフトでも無効化するということになる。

だからこそ、白夜叉はその可能性を破却した。

蛇神を殴って倒す身体能力のギフトと、どんなギフトも無効化するギフト。それが一つの身体に収まっている矛盾に比べれば、〝ラプラスの紙片〟が誤作動しているという方があり得ると考えたからだった。

白夜叉は思考を切り上げると、解散を言い渡し柏手を一つ打った。

すると一瞬で元の和室に戻ってきた。

そのまますぐに女性従業員がやってきて追い出すように店の門前まで追い出されてしまった。

用が住んだならさっさと帰れということだろう。

「そうそう、最後に一つ聞いておこう。お主らは黒ウサギのコミュニティの状況は理解

しておるのか？」
「ん？　ああ、名前も旗もない、だから金もないし戦える仲間もいないってやつだろ」
「それがつまり名と旗を取り戻すためには魔王と戦う必要があるということもか？」
「そうよ？　魔王を倒すなんてカッコいいじゃない」
「若いのう、そこの十六夜とやらはまだしも。お主らにその力があるようには思えん。だから本気で魔王に挑むのであれば多くのギフトゲームに参加し、力をつけるのじゃな」
「……ご忠告感謝するわ」
　少し不機嫌そうに飛鳥はうなずいた。
「うむ、まあ魔王の力がどのようなものかはお主らのコミュニティに変えればわかる事じゃろう」
「よくわからないけど、いろいろ助かった、ありがとう」
「うむ、力をつけたら私とギフトゲームをしよう。チップは黒ウサギでな」
「何を言い出すのですか白夜叉様！」
「おう、その時はぼこぼこにしてやるぜ」
「いやいや、何をカッコ良く了承してるのですか十六夜さん！」
「なんじゃ不満か？　毎日三食首輪付きで迎える用意があるのじゃぞ？」

「冗談もほどほどにしてください～!!」

そのまま問題児たちは、笑いにつつまれながら店を後にするのだった。（黒ウサギを除いて）

6．月夜に巡らす策謀

屋敷に帰ったガルドは、まずコミュニティのメンバーを集め包み隠さず事情を説明した。

３０人ほどのメンバーはそれぞれ反応は様々だった。

ひどく狼狽するもの、ガルドの責任だとわめきたてるもの、呆然とするもの、中には何を思ったかガルドに襲いかかる者もいた。一撃で壁にめり込むことになったが。

それらの反応を見てしかしガルドは言った。「逃げたければ逃げろ」と

「１０分待ってやる、その間俺は執務室に戻るが逃げたい奴は何でも持てるだけ持って逃げるといい。だが戻ってたときに残っていたら俺の手駒だ、俺の命令には絶対服従。いいか、１０分だ。考える時間は短いぞ、すぐに決断しろ」

そう言って、ガルドは自分の執務室に戻った。

そして１０分後、残っていたのはたった三人だった。

「ふうん、お前らは逃げなくていいのか？」

どいつもこいつも街で拾ったゴロツキ達だった、人の迷惑なんてかえりみない、暴力に訴えることもしばしば、退屈しのぎにガルドがボコってこき使っていた奴らだった。

さっき壁にめり込んだ奴までいた。
「今更どこ行くっていうんですか、もとから戻るところなんてねぇっすよ」
「そうそう、どうせ逃げたって捕まるって、なら最後ぐらい楽しまなきゃ」
「あんたについていくって、あんたは強ぇからな」
「お前ら馬鹿だな、ああ、俺も馬鹿か、はははははっ!!」
ガルドは笑いながらそう言った、自分もバカだったのを思い出して二度笑った。
他の奴らは結局金や権力のためにすり寄って来た屑で、残ったのは馬鹿ばかり。
だがこの三人は馬鹿だから怪我もなくいられたのだ。
「失礼するぞ」
その時、正面玄関の扉が開かれ一人の少女が入って来た。
透けるような白い肌、月の光のように輝く金の髪、そして宝石のような赤い瞳。
幼さの残る顔立ちと低い背丈も相まって何所か華奢な印象を受けるが、その手に引きずる気絶した獣人を見てためらいなく襲いかかれるのは、能無しか、自分の力に自信があるかのどちらかであろう。
彼女は鬼の純血。〝箱庭の騎士〟と呼ばれた力ある種族である吸血鬼であった。
「おう、終わったか?」
「ああ、適当に気絶させた。後で縄で縛って広場にでも放り出しておこう」

「いやあ、助かるぜ、馬鹿はまだしも屑を野に放つのは心が痛む」
胸に手を当て、さも心苦しいというような顔をするガルド。
逃げていいといいながら、もともと逃げればこうする予定だった。
ガルドはとてもすがすがしく笑った。
「お前の部下だった屑だろうに、容赦がないな」
「死んではいないんだろう？　なら何の問題もねぇ」
「ボ、ボスこいつはいったい…」
「ん？　盗人に天罰が下っただけさ」
「いや、天罰って…」
明らかにあんたの仕業だろ、とは言わなかった。外の奴らの仲間入りしたくはなかった
苦悶の表情で股を抑え気絶している外の奴らを見て、残ったうちの一人はそう思った。
「おう、おまえら、外の奴らをふんじばって外に放り出してこい。ついでに地下の人質も一緒に解放して来な！」
「えっと、いいんですか？」
「いいんだよ、世話するのもめんどくせぇ」

「は、はあ、了解しやした」
　部下たちはそそくさとその場を立ち去った。
「なかなかいい部下じゃあないかガルド」
「まあな、俺の部下にあんなに馬鹿がにいるとは俺も知らなかったぜ。事が終わったらあいつらのことは頼むぜ？」
「ああ、白夜叉殿も了承してくれた。迷惑を掛けたコミュニティで無料奉仕させるとのことだ。屑は相応の刑罰を与えるとのことだったが」
「そうかいそうかい」
　ガルドは安心したように息をついた。
「とりあえず俺の部屋でも来るか？」
「襲われてはかなわんな」
「いやあ、さすがにねぇよ。俺の好みはもっとグラマラスな女だぜ？」
「……」
　ガルドはからかう世に笑った
　自分の身体をかんがみて、レティシアは押し黙った。言い返すには自分の今の姿はあまりに貧相すぎたからだ。
「そうか」

「いや、そんな落ち込むなって。大人の姿はそそるものがあったぜ？」
「そう言われても困るがな」
ガルドはげらげらと笑った。

ガルドの執務室は二階にあった。広々とした部屋の中には高価な執務机やソファ、調度品などが置かれている。ガルドにとってこれらは必要のあるものではなかったが、見た目という物も重要であることは熟知していた。
しかしそれももう必要もない。ガルドにとってこれらは何の未練も価値もありはしないのだ。
レティシアはソファーに座り、ガルドは執務机に座った。
「それで、ゲーム内容は決めてあるのか？」
「ああ、単純でわかりやすいのを作ってある」
そう言ってガルドは〝契約書類（ギアスクロール）〟を投げて渡した。
その〝契約書類（ギアスクロール）〟を読んだレティシアは眉根を寄せた。
「これだと簡単すぎないか？」
その指摘にガルドもうなずいた。

「まあな、お前にも少し手伝ってもらうし小細工もするが、これだけじゃあな。
だが、俺がこれを使うとなればどうだ？」
そう言ったガルドの手には白に黒の縁取りがされたギフトカードが握られている。
それを見たレティシアは眼を見張った。
「まさか、それを使うのか？」
「使うさ、当然だろ？」
「そうか…」
「心配しなくても案外いい勝負になると思うぜ、なかなか面白い匂いがしたからな」
ガルドの持つギフトは虎の種族としてのギフト、人化のギフト、そしてガルド固有の能力として、相手の種族や能力を匂いによって大まかに把握するギフトだ。
これによりガルドは問題児たちが持つ力の大きさを感じ取っていた。
まさに規格外の才能。あと十年も生きれば箱庭に名を轟かすだろう。
それがたまらなくうれしい。
お遊びではなく、本気の本気、死力を尽くして戦いたい。そして出来るなら勝ちたい。
かつてそう願った相手がいた。
敗北し、土にぬれた事があった。初めて負けたあのとき、必ずその相手に勝つと誓った。

あの時の屈辱は今でも忘れない。
だからこそ努力した、だからこそ人化し街に居を構えた。
全てはかつての屈辱を晴らすため。勝利のためだった。
しかし、そのコミュニティは魔王によって壊滅した。
残ったのは残骸のような弱々しい子供の集団。もはやガルドの相手が務まるはずもなかった。
結局リベンジを果たすことはできなかったのだ。
それからは胸に穴が開いたかのように空虚な日々だった。目指していた目標がなくなり、つまらない相手に拾われ、つまらないことをして、つまらない相手と戦った。何もかも退屈しのぎで暇つぶし。
望むものとはかけ離れた生活だった。
だから、レティシアが持ちかけてきた話にガルドは一も二もなく乗ったのだ。
新たな同士が入り、もしかしたらかつての宿敵の代わりになるのでは、とそう思えたから。
様子見の予定だったのにあっさりと悪事がばれたのは予想外ではあったが、それだけ浮かれていたのだろう。
それにこれはこれで悪くはない、明日にでも戦えるのだから。

「ああ、楽しみだ」
ガルドは月を見上げ野獣の笑みで低く笑うのだった。

サウザンドアイズの支店を後にした問題児一行は黒ウサギのコミュニティが管理する居住区画の境目までやって来た。目の前にはしっかりとしたつくりの門が立っている。
「ここから先が我々のコミュニティでございます。しかし本拠にはまだしばらく歩かなければなりません。まだ魔王の残した爪痕が残っておりますので」
「へぇ、魔王が残した傷痕とやらがどれほどのものなのか、見せてもらおうじゃねぇか」
十六夜は臆することなく先頭を進んだ。
それに一行もついていく。
そして門をくぐり抜けた先にあったのは、半ば砂漠と化し崩れた廃墟だった。
「なんだ、こりゃあ」
その光景に言葉を失った。
近寄って見るとさらにおかしなことに気がついた。

「おい黒ウサギ、魔王とのゲームがあったのは3年前だったよな」
「はい、その通りです」
「この壊れ方は明らかに時間経過による風化だ。たかが3年じゃあこうはならねぇ、明らかに百年単位で時間がかかるぞ」
「それに、みて。ベランダのテーブルにティーセットがそのまま出ているわ。まるで突然住んでいた人がいなくなったみたい」
「生き物の気配がしない、人がいなくなっているのに動物がよってこないなんて」
十六夜に比べて耀と飛鳥の声は暗い。
「ぼろぼろ、なんだか嫌なものを思い出すなぁ」
明彦は明彦で元の世界を思い出して嫌な顔をしていた。
もっとも、明彦の世界にはこんな原形をとどめている廃墟など珍しいぐらいだったが。
「魔王のゲームはそれほど未知のものだったのでございます。魔王がこの土地を取り上げなかったのはおそらく見せしめのためでしょう。この惨状に心折られ、残っていた仲間たちもコミュニティを、箱庭を去って行きました」
黒ウサギが暗い顔をしていった。耀も飛鳥もさすがに顔色は良くない。明彦もいつもの笑顔ではない。

都は変わらず感情の薄い顔だ。
しかしただ一人、十六夜だけが笑っていた。
獰猛な笑顔だった。
「いいねぇ、想像以上に面白そうじゃねえか」
十六夜だけはまだ見ぬ魔王に戦意をたぎらせていた。

陽が暮れ月明かりが照らす中、問題児一行は荒廃した居住区画を進む。
建物の外観が徐々に整ったものに変わって行くが、黒ウサギはそのまま通り過ぎ、大きな貯水池に一行を案内した。
どうやら水樹を設置するらしい。
貯水池の中心にある東屋にまでやってくるとそこにはジンと２０人ほどの子供が水門や貯水池の掃除をしていた。
「あ、みなさん。貯水池と水門の準備は整っていますよ」
「お疲れ様ですジン坊ちゃん。みんな、集合してください」
黒ウサギが声を張り上げると、掃除をしていた子どもたちはすぐに集まり、ピシッと整列した。
「皆さん、こちらがコミュニティのメンバー達です。此処にいるのは一部ですがよろし

くお願いします」
「「「よろしくおねがいしまーす！」」」
大きな声で元気にあいさつする子供たちに少々気後れする耀と飛鳥。二人は子供が苦手だった。
十六夜はヤハハと笑っていたる。
黒ウサギはそのまま5人の紹介に入る。
「右から逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さん、千宮明彦さん、都さんです。
みんなはこれからこの方たちのためにしっかりと働いていく必要があります。それを肝に銘じておいてください」
「黒ウサギ、もう少しフランクでもいいのよ？」
「ダメです！　彼らはギフトゲームで戦うことはできません、だからこそプレイヤーとして戦う者たちの為に尽くす必要があります。それはどこに行っても同じなのです。ここで甘い顔をすることはこの子たちのためになりません」
「……そう」
黒ウサギの真剣なまなざしに、飛鳥も黙るしかなかった。
黒ウサギは子供のためを思って本気で考えているのだ。甘い考えで文句をつけるのは飛鳥の恥になる。

「ここにいる子供たちが年長組ですので、何かご用がおありならばこの子たちに行ってください」
「おう、わかった」
「それじゃあそろそろ水樹を植えましょう。十六夜さん水樹をギフトカードから出してもらえますか？」
「ほらよ」
十六夜がギフトカードをかざすと、水樹が黒ウサギの手に収まった。
黒ウサギが、東屋の中央にある縦穴の上で覆いを取り払うと水樹はその根を伸ばし柱に絡みつく。
そして、動きがおさまると今度は猛烈な勢いで根っこから水を生み出し始める。
水は縦穴を通って貯水池に流れ込み、大波となって満たしていく。
その光景にジンや黒ウサギ、そして子供たちが大きな歓声を上げた。
明彦もそれを見て楽しそうに笑った、明彦の世界でこんなに水があるところはなく、毒の混じった水を人間が奪い合ったりしていたものだ。
それを思い出し、明彦は少しさびしそうに笑った。あの世界がどうなるのかはわからない、たとえ残っていたとしても変化がわかるほど長生きはできない。
できることはすべてやったが、あの後１００年、２００年と経ちどうなるのか、それ

がわからないことだけが、明彦の心残りだった。
ふと見ると、十六夜とジンが何かを話している。
どうやら十六夜がジンに何か言っているようだ。
話が終わり、十六夜が離れていく。
ジンは真剣な顔で空の月を見上げた。
「子供が面倒な責任を負って、大変だねぇ」
「明彦さまは彼をリーダーとして認められるのですか？」
都は不満そうである。
「んー頑張りましょうってとこ？　ま、手を貸すぐらいは気分次第かな」
明彦は笑って言った。

水樹を配置し終え、コミュニティの本拠地にたどり着いたのはもう陽が暮れてから時間が過ぎ、夜中となったころだった。
コミュニティの本拠地は予想よりもかなり大きく、もう屋敷というよりも小さなビルというべき大きさだった。家が財閥だった飛鳥でさえ驚いたのだからそのお察しであ

る。
　中に入るとすぐに黒ウサギは風呂の準備をしに走り去って行った。元気なことである。
　いい加減に歩き疲れた問題児たちは案内された貴賓室で休んでいた。
　能力以外は一番普通といえる飛鳥はソファに身体を預けていたし、耀も飛鳥ほどではないが疲れているようだった。
　くらべて十六夜と一番幼そうな明彦はは全く問題なさそうで、都は明彦の横に黙って控えていた。
　しばらくして黒ウサギが戻ってきた。
「お風呂の用意ができましたよ！　女性の方からどうぞ！」
「ありがとう。じゃあ、お先に失礼するわ」
「俺は二番風呂が好きな男だからな、一番風呂は譲ってやるぜ」
　十六夜も快く承諾したので、先に女子が入ることとなった。
　しかし、都はそれに渋い顔をした。
「都も入ってきなよ」
「…しかし、良いのですか？」
「大丈夫大丈夫、いいから入ってきな」

「……わかりました」
明彦に言われ、何かをあきらめたように都は承諾した。
そして十六夜を振り向くと、小さな声で言った。
「明彦様をお願いします」
「ん、大船に乗った気分で任しときな」
そのまま女性陣が立ち去ってしばらく。十六夜と明彦はそろって立ち上がった。
「じゃあ行くか」
「そうだね」
そのまま二人は当然のように屋敷の外に向かった。

丁度今夜は十六夜の月だった。
だからどうだというわけではないのだが、明彦が空を見上げたら丁度月が出ていた、それだけだ。
女性陣が風呂に入ってから結構時間がたっているが、その間ずっと待ちぼうけだ。
いい加減待つのに飽きた十六夜が声をかけた。

「おーい、いい加減出てきてくんねぇか？　俺が風呂に入れねえだろ」
話しかけた先は庭の先の森である。
当然というべきか、返事はなかった。
それに対し、十六夜は小石を数個拾うと軽く放った。第三宇宙速度よりは遅い速度で。
遅いとは言ったものの放たれた小石は爆撃のような破壊と轟音を撒き散らし、隠れていた人影を吹き飛ばした。
「十六夜って、でたらめだね」
「まあな、ヤハハ」
何をどうしたらあんなバカげた威力を小石一つで叩き出せるというのか。
明彦でさえ呆れる一撃だった。
「な、なんの音ですか！」
轟音に慌ててジンが飛び出してきた。
「何って、侵入者ってやつだよ。例の〝フォレス・ガロ〟ってやつらじゃねえか？」
そこに丁度森から隠れていた3人の人影が姿を現した。
「こ、このデタラメな威力、あんたが蛇神を倒しったって奴か」
「おう、そうだぜ。で、お前らは〝フォレス・ガロ〟の人間、いや人間じゃないのか？」

見れば侵入者はそれぞれ身体の眼や肌などが獣や爬虫類のように変化していた。
「俺たちは獣のギフトが半端に混じってるからこんな姿だが、一応ベースは人間だぜ？」
「へぇ……まあそれはそれとして何でこそこそ覗き見してたんだ？」
「うちのボスに挑もうって奴らがどんな奴らか見に来ただけだ」
「……へぇ？」
十六夜はちょっと予想外だったのか、少しだけ笑みを深めた。
人質を取りに来たとかだったらわかるのだが、さすがに見に来ただけだと堂々と言うような馬鹿が相手だとは思わなかったのだ。
「お前ら馬鹿だろ」
「おう」
「馬鹿だぜ」
「ボスにも言われた」
「おいおい…」
三人は馬鹿だといわれて怒るどころか逆に堂々とそれを認めた。
今度こそ十六夜は呆れ、面白そうに笑った。
こいつらは馬鹿だが、面白い馬鹿だ。そう思ったからだ
「それでその馬鹿三人は見物したら帰るのか？」

面白くはある、が、さすがに十六夜もタダで逃がす気はなかった。
それとこれは話が別だった。
「いや、もし気づかれて、帰させてくれなさそうになったら、えーと」
人影の一人が何やら紙きれを取り出した。
「〝お前らの好きなように宣伝してやるからここは黙って帰してくれ〟って、書いてあるな」
「どういう意味だ？」
「さあ？」
三人は全くわかっていないように顔を見合わせた。
しかし十六夜はそれを聞いて、本当に、本当に面白そうに笑った。
「くっそ、失敗したかもな。こんな相手なら、ゲームも結構面白かったかもしれねぇ。今からでも参加できねェのか」
「えっ？　どうしたんですか十六夜さん」
ジンは困惑した。十六夜がなぜ笑っているのか見当もつかないからだ。
「なんでもねぇ。おい、お前ら！」
「なんだ！」
「お前らは帰ってこう宣伝しろ、このジン坊ちゃんが魔王を倒すコミュニティを立ち上

げるとな」
「は!?」
「おいおい、どう意味だそりゃあ」
ジンも、馬鹿三人も、困惑したような声を上げる。
それはそうだろう、どうしてそんな話が出てくるのか全くわけがわからないのだ。
多分わかるのは当人である逆廻十六夜と、ここにはいないガルド＝ガスパーくらいなものだろう。
「言葉通りさ。俺たちは魔王の脅威にさらされたコミュニティを守るコミュニティを創る。
守られたコミュニティはこう言ってくれ。〝押し売り・勧誘・魔王関係お断り、まずはジン＝ラッセルの元に問い合わせください〟ってな」
「は、はあああ!?」
ジンが叫びそうになるのを十六夜が口をふさぐ。ジンも抵抗するが、微動だにしない。
明彦は面白そうに十六夜のやることを眺めた。何をするつもりかは知らないが、なんだか面白いことになりそうだと思ったからだ。
「えーっと、それを伝えれば見逃してくれんのか?」

「おう、一言一句間違えずに伝えろよ」
「おう、紙に書いたから問題ねぇ、それじゃあな、あばよ」
そのまま馬鹿三人は夜の森の中をガサガサと走り去って行った。
「なんだか面白そうなことになったねぇ」
「なあに、これから面白くなるんだよ」
十六夜は明彦にそう言ってそう言って手を離し、そのまま屋敷に戻っていく。
その顔は晴れ晴れしく笑顔だった。

7．暮れゆく箱庭の夜

「どういうことか説明してください！」
　月明かりが射しこむ館の大広間で、ジンは我慢しきれずに叫んだ。
「確かに、旗と名を奪った魔王を倒そうというのは僕たちの目標です。しかし、あれじゃあ」
「どんな魔王とも戦うコミュニティ？」
「そうです、あなただって見たでしょう。魔王が残した爪痕は」
「そうだな」
　十六夜は反論もなくジンの言葉にうなずいた。
「なら、なぜ！」
「ひとつ、聞いていいか？」
　憤るジンの言葉を十六夜が遮る。
「なんですか？」
「お前は俺たちを呼び出して、そのあとどうするつもりだったんだ？」
　聞かれ、ジンは少し冷静になって前から考えていたことを話す。

「それは、まずは水源を確保するつもりでした。それで生活の基盤をまず整えるためです。これは十六夜さんが水神に勝利しすでにクリアされました。そこは感謝します」
「おう、感謝しつくしな。んで次は？」
「次はギフトゲームに参加して堅実にコミュニティの力を高める予定でした。皆さんの力あればそれは難しくはないはずですから。なのに、十六夜さんは魔王を倒すためのコミュニティなんて言い出して、むやみに危険性を増やした。一体どういうつもりなんですか！」
　ジンは怒るが、逆に十六夜は呆れた顔をした。
「おいおい、それだけかよ」
「どういう意味ですか？」
「お前のプランはそれだけかって言ってるんだ」
「それは……」
「はあ」
　十六夜はため息をつき、頭をガシガシとかいた。そして再びジンに向けられた瞳は真剣そのものだった。
「失望したぜ御チビ」
「な!?」

「お前その程度の甘い考えで魔王に勝てるとでも思ってるのかよ」
「どういう意味ですか？」
「言葉通りだ。お前の言ってることは大前提、当たり前のことだ。俺が聞いてるのは魔王にどうやって勝つかってことだよ」
「だからそれは、ゲームで力をつけて」
「ただそれだけで魔王に勝てるんなら、ここも滅ぼされることもなかっただろうぜ」
「……」
「何よりも必要なのは人材だ。だが今このコミュニティには名乗るべき名も、示すべき旗印もない、だから代わりが必要になる。その代わりにお前がなるんだ」
十六夜がジンを指差して言った。
そこまで言われ、ようやくジンは十六夜が何を言いたいのかを理解した。
つまり十六夜はジンの名前と魔王に対抗するという特徴を広めることで他のノーネームとの差別化を図ろうというのだ。
「ノーネームのまま強い特徴とリーダーの名前で差別化する…」
「それでけじゃないぜ、魔王が災害と呼ばれるほど派手に戦っているのなら、それによって滅ぼされたコミュニティも少なくないはずだ。なら、その生き残りも多くいるはず。そんな魔王への復讐を誓った連中の耳に魔王に対抗するために立ちあがったコミュニ

ティの噂が届けば…」
「その人たちも集まってくる…！」
「そう言うことだ。一挙両得、一石二鳥、これ以上にいい作戦があるっていうのなら俺も協力は惜しまないぜ？」
　ジンは驚いた、このとてもよく練られた作戦に、そしてこの作戦を思いつく十六夜の頭脳に。
　だからこそ、一つだけ条件を付けることにした。
「ひとつだけ条件があります。今度開かれるサウザンドアイズのギフトゲームに十六夜さんが参加してもらえませんか？」
「なんだ、俺の力でも見せろってところか？」
「それもあります、ですけどそれだけじゃありません。そのギフトゲームには、元魔王だった昔の仲間が出展されるのです」
「へぇ…」
「彼女を取り戻すことができれば、大きな力になるはずです」
「なるほどな。元・魔王ってことはなかなか期待できそうだ。いいぜ、出てやるよ」
「ありがとうございます。それができれば魔王に対抗することもできますし、十六夜さんの作戦も指示します。ですからそれまでは黒ウサギには内密に…」

「あいよ」
　話が終わって大広間を出ようとした時、十六夜は何かを思いついたかのようにジンを振り返った。
「明日のゲーム、負けるなよ」
「はい」
「負けたら俺このコミュニティ抜けるから」
「はい。……え!?」
　十六夜は扉を閉めてそのまま出て行った。
　最後の十六夜の言葉にジンはしばらく茫然と立ち尽くすのだった。

　しばらくして、大広間に都がやって来た。
「すみません」
「え……あっ、はい、どうかしましたか?」
「いえ、こちらに明彦様はいらっしゃらないでしょうか?」
「え、ここにはいませんけど」
「そうですか……」
　それ以上話すことはないのか、都は踵を返して部屋を出て行った。

地面に転がるとと空の星がくっきりとよく見える。
何でも天幕にそのような機能があるらしい。
なかなかすごい話だと思う。
これだけ巨大なものにそんな繊細な機能を与えるとは、一体どうやって作ったのだろうか。
今日一日この箱庭を歩いて、明彦は感動しきりだった。
人は笑顔で、太陽の下のびのびと生きている。これが平和という物か。
価値観の違う相手と対等な立場にある。これが友達という物か。
何よりこの世界は希望に満ちている。
すべて明彦の世界にはなかった物だ。
明彦の世界では手に入らなかったものだ。
そのことがうれしい。
「明彦様」
「ん…都か」
見れば、いつの間にかすぐそばに都が立っていた。
「質問がございます」

「へぇ、なんだい？」
都が自分から質問をするなんて珍しいことだった。
はじめてかもしれない。都はいつも明彦に従順でどんな命令にも従ったからだ。
もしかしたらこれは反抗期というやつなのかもしれない。
そう思うと、明彦は面白そうに笑った。
「なぜ、明彦様はこの世界へいらしたのですか。あの世界であれば何物にも脅かされずに生きることができたはずです」
「ああ、そう言えば説明していなかったね」
都は偶然ついてきてしまったから聞きたいこともあったのだろう。
それでも黙ってついてくるのは都だから仕方がないのだろうけど。
まあ、本当なら説明する予定はなかったのだが。この際しょうがないだろう。
明彦はできるだけ簡潔に答えた。
「僕のできることはすべて終わったからだよ」
「そのようなことは…」
「いや、終わったんだ。あの世界は何時かよみがえる。そうなるよう僕が手を尽くしたから。でもそれは何百年も先の話で、僕はそんなに長生きできない。
できることはやった、もう僕が手を出す必要はない、だから後を任せて招待に乗った。

それだけだよ。まあ、都が来たのは予想外だったけど」
「私も、置いて行かれるおつもりだったのですか？」
「うん」
そう言うと都は目を潤ませ、悲しそうに明彦を見つめる。
こういう顔を見たくなかったから黙ってたんだけどなぁ、と明彦は心の中で愚痴った。
「そんな顔しないでよ。というかね、都はもっと自由に生きていいの。僕のことなんか気にしなくてもいいの」
「自由であるというのなら、私は明彦様に永遠に仕えたく思います」
都は膝をつき、こうべを垂れる。
明彦は眉根を寄せて、深々とため息をついた。
それは諦めであり、落胆であった。
明彦が都に期待していたのはそう言うことではないのだ。
しかし、それをここで都に言ったところで変わるまい。だから明彦は何も言わなかった。
「はあ。わかった、好きにするといい」
「はい」

言ったとたん、いつもの無表情をほんの少し笑顔に変えて、都は嬉しそうに頷いた。
「それじゃあ僕はお風呂に入ってくるから都は先に寝てていいよ」
「ご一緒します」
「……いやね、一緒にってお風呂に入るんだよ？」
「ご一緒します」
「ダメ」
「ですが私は…」
「前にも言ったでしょ、ダメ」
「……」
また都は悲しそうに目を潤ませた。
しかし明彦は断固として跳ねのけた。
「風呂ぐらい一人で入れるからそんな顔をしてもダメ」
「……」
「……」
「……わかりました」
無言で睨み続けると、都はしぶしぶ引き下がった。
それを見て明彦はほっと胸をなでおろした。

昔、明彦は迂闊にも許可を出して都に体の隅々まで洗われそうになった事があるからだ。

その時は全力で逃げ出してことなきを得たのだが。

久しぶりにまともなお風呂ということで都も張り切っていたのかもしれないが、やられる方は恥ずかしくてたまらないのである。

どうしてこんな風になってしまったのかと、いつもとは違った風に明彦は嘆いた。

「それじゃ、行こうか」

「はい」

明彦が歩き出すと都はその一歩後ろをついていく。

結局、自分たちはこうなのだろうと、明彦は諦めた。

こうして、箱庭一日目の夜は更けていったのだった。

8．ガルドのゲーム

8．ゲームスタート

あくる朝、問題児一行はゲームに参加するため、〝フォレス・ガロ〟のコミュニティへ向かった。

途中商業区で解放された人質や傘下のコミュニティから熱烈な声援を受ける。また、ジンの名と、魔王に対抗するコミュニティを作るといううわさも広がっているようだった。

ガルドが約束を果たしたことを確認できた一行は、意気揚々とゲームの舞台である〝フォレス・ガロ〟の居住区にやって来たのだが・・・

「〝フォレス・ガロ〟の居住区はずいぶんと独特なのね」

飛鳥は皮肉げにそう言った。

飛鳥が見つめる先には、壁や柵を絡めとりながら蠢く木があった。

明らかに普通ではないその植物を不気味そうに眺める飛鳥。

明彦は逆に興味深そうに近づいて観察している。

問題はおかしな木がこれ一本ではなく、フォレス・ガロ〟の居住区全域にはびこっていることだった。

見る限り襲ってくるということはなさそうだが、こんなところに住むなんてとてもまともとは思えなかった。

「ジャングル？」

「虎の住むコミュニティとはいえ、これは明らかにおかしいだろ」

「はい、僕の知る限り、先日までここは普通の木が生えていたはずです。それにこの木」

ジンは木に手を伸ばす。幹に手を触れると、表皮の下で血管のように脈動しているのが感じられる。

「これは――やっぱり〝鬼化〟している？　いや、まさか」

そんなことができる存知り合いが一人いるが、こんなところにいるはずもなく、またする理由もないからだ。だからジンは頭を振ってその考えを振り払った。

「にしても、迎えの一つもないのかよ。そろそろ正午になるぜ。それとももうゲームが始まってるのか？」

「いえ、そんなはずはないですよ。少なくともゲームの初めに〝契約書類（ギアスクロール）〟の提示が必要ですから」

「となると中に入るべきか？」

十六夜が敷地に足を踏み出そうとした時、森の中から声が響いた。
「いや、その必要はないぜ?」
奇怪な森の奥から悠然と姿を現したのはガルドだった。
ガルドは笑顔でノーネームの面々と向き合う。
その際、ガルドは鼻をひくつかせ少しだけ十六夜の方を向いたが、すぐに今回の対戦相手の方に向き直った。
「よくぞいらした御客人、今日は大いに楽しんで行ってくれ。演目の内容はよく確認してくれよ?」
芝居がかった大仰な振る舞いでガルドは〝契約書類（ギアスクロール）〟を差し出した。
それを飛鳥が受け取る。
受け取った〝契約書類（ギアスクロール）〟にはこう書かれていた。

『ギフトゲーム名　〝星の根源〟
プレイヤー一覧　久遠　飛鳥
春日部　耀
千宮　明彦
都

ジン＝ラッセル

フォレス・ガロの館敷地内において世界を構成する真の要素を祭壇に捧げよ。

クリア条件　祭壇に上記を揃えること。

クリア方法　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

敗北条件　上記を尊重し、誇りと御旗の下、ギフトゲームを開催します。

宣誓　〝フォレス・ガロ〟印』

黒ウサギも〝契約書類（ギアスクロール）〟の内容を確認する。

心配していたようなこちらに明らかに不利になる要素は盛り込まれていない。

見る限りは謎を解けばクリアは容易だろう。

その事に黒ウサギはとりあえずほっと胸を撫で下ろす。

そもそもこの場にガルドが現れた時点で勝ちは決まったようなものだ。

飛鳥のギフトがあれば、ガルドにゲームの解説をさせることが可能なのは既に証明済みだ。

「見る限り問題は無いと思います」
「〝箱庭の貴族〟にお墨付きが貰える光栄だ。ならとっと始めるか、このコインが地面に落ちたらスタートだ」
ガルドがコインを取り出して見せる。
「いくぜ？」
それを指で弾く。
顔の高さまでとびあがったコインは落下し始め、地面に着いた。
「じゃあ〝動くな〟」
その瞬間、飛鳥の言葉が放たれた。
瞬時に硬直するガルド。
「これでゲームオーバーね」
飛鳥が勝ち誇った。飛鳥の持つギフト〝威光〟は知性のある生きものを支配するギフト。
普段使うことは嫌いだが、ゲームとなれば話は別。
のこのこと現れたのなら使わない理由はない。
しかしガルドは、口の端を持ち上げて、にやりと笑った。
そして、動かないはずの身体で一歩前へと足を踏み出した。

「えっ!?」
「あめぇよ、嬢ちゃん」
一番近くにいた飛鳥にガルドが襲いかかった。
飛鳥は強力なギフトを持つものの、単純な身体能力でいえば問題児たちでもっとも普通である。
元が虎であるガルドの一撃をくらえばひとたまりもない。
飛鳥はガルドの一撃をよけられず、ガルドの一撃は空振った。
「!」
瞬時に飛びのき距離をとるガルド。
見れば飛鳥は明彦に抱えられていた。
手を伸ばして届くほど近くはない。何らかのギフトが使われたのだろう。
空気の異常な動きから風を操る能力と推測する。
しかしガルドは心の中でいぶかしむ。ガルドの鼻は明彦から香る匂いと、風を使うギフトの匂いが食い違ったからだ。
しかしそんなことはおくびにも出さず、ガルドはうれしそうに笑った。
「やるじゃあねぇか。今の奇襲で嬢ちゃんを退場させるつもりだったんだがな」
「そんなに簡単に退場したらつまらないでしょ？　それよりも飛鳥ちゃんのギフトが利

かなかったのはどういう仕掛け？」
「話すとでも思うか？」
「やっぱ無理？」
「ダメだな、とはいえここはいったん引かせてもらうぜ」
　させないとばかりに耀と都が前に出た。
　〝フォレス・ガロ〟が何人参加しているかは知らないが、ガルドが最大戦力であることは間違いないだろう。ならば今、最大戦力が集まってる今ここで倒してしまえばゲーム攻略も楽になる。そう考えたのだ。
　それは当然ガルドもわかっていた。
　スッとガルドが手を上げる。
　身構える二人。
　しかし攻撃はガルドの背後、森の中から放たれた。
　丸い何かが耀と都めがけて三つ投擲される。
　二人は避けたが、その球は地面にぶつかると簡単に破裂し赤い煙をあたりにばらまいた。
「な、なにこれ、眼と鼻が…ゴホッ」
「う…うう」

その赤い煙は粘膜に触れると反応し、強い痛みを発した。
飛鳥と耀、ジンはその痛みに顔をかばった。
その間にガルドは遁走する。
問題がないのか都と明彦は平然としているが、遠距離攻撃の手段を持たないのと、このまま追いかけて突出するのは危険と判断し追わなかった。
被害のない十六夜は森に消えたガルドを面白そうに睨んでいた。
「あれがガルド＝ガスパーね、なかなか見た目に反して小技も使ってくるじゃねぇか」
「そうですね、以前見たことがありますけど、その時はもっと…こう、別人のようでした。悪い意味で」
「ま、それはともかく。大丈夫かよおまえら」
「は、はい…大丈夫です」
「まさか、私のギフトが効かなくなってるとはね」
「予想外」
とはいえまだ飛鳥のギフトがガルドに効かなかっただけ。
まだまだできることはある。
「とにかく、ゲームは始まっているわ。先に進みましょう」
「そうだね」

十六夜と黒ウサギを残し、五人は警戒しつつ森の中へと足を踏み入れていった。
「大丈夫でしょうか、皆さん」
「さあな、あいつ等次第だ」
そのまま二人は門の外でゲームが終わるのを待ち続けるのだった。

森の中に分け入った一行は、奇襲を警戒しつつも大胆に歩を進める。
それというのも、耀の〝生命の目録（ゲノム・ツリー）〟の力により、犬の嗅覚を得ていたからだ。
もしも誰かが隠れていても、匂いでわかるのだ。
しかし、予想していた奇襲や罠などはひとつもなく、一行は障害に阻まれることなく〝フォレス・ガロ〟の本拠地にたどり着いた。
フォレス・ガロ〟の本拠地はなかなか大きな屋敷だが、今は木に絡みつかれ不気味な外観に変貌していた。
「なにもなかったわね」
「外をこんなにしておいて、いったいどういうつもりなんだろうねぇ？」
明彦は肩をすくめる。館に罠を張るにしても外をこんな風にする理由はないはずなのだ。

（それとも何か別の狙いが？）
「さて、まずはここで手掛かりを探しましょうか」
「そうだね、この中に〝祭壇〟があるといいんだけどね」
「…あけるよ」
扉は抵抗もなく開かれた。
中を覗き込むと、木もここまでは入ってこなかったか特におかしなところはない。
いや、調度品の類が乱雑に散らばっている。
「どうしましょうか？」
「とりあえず、全部の部屋を見て回りましょう。細かく調べるのはそのあとよ」
「了解」
とりあえず館の中を調べることとなった。
なかなか広い館だが、ざっと調べるだけならそう時間はかからない。
地下一階にあるいくつかの部屋は生活感はあるものの何かが隠されている風には見えなかった。
一階のキッチンや倉庫も食料や酒などがあっただけで特に手掛かりになるようなものは見つからない。
そして、二階を調べていくと、二階の中央に位置するおそらく館の主が使用していた

と思われる部屋に明らかに部屋の雰囲気にそぐわないものが置いてあった。
「これが、祭壇かしら？」
「おそらくそうだと思います」
それは丸く太った本体に小さな足が三つついた何かの台座のようなものだった。
派手な赤と輝く金に彩られており、特徴的な龍の彫刻が目を引く非常に豪奢な作りになっている。
そして一番目を引くのが天板に描かれた、それぞれの頂点に円がつながる五芒星であった。
「これが祭壇で間違いなさそうね」
「おそらくは」
「問題はこの祭壇にささげる〝真の要素〟が一体何なのかだね」
「うーん、というか手掛かりあっても全く役に立てそうにないんだよねぇ。僕ってこういうことにうといんだよねぇ」
「そう、なら周囲の警戒をしておいて。ガルドが何時襲ってくるかわからないわ」
「了解」
飛鳥は、それだけ言って台座に向き直った。
じっと台座を睨みつけ、ふと、思い出すことがあった。

「これって、もしかして五行説に関係してるんじゃないかしら？」
「五行説？」
「ええ、私も詳しいわけじゃないけど、世界は木・火・土・金・水の五つの要素が相互に影響しあってできている、という思想だったはずよ」
「５行、五つ。この祭壇の模様とも符合しますね」
　ジンの顔が明るくなる。
「つまり、五行を集めろと」
「そう言うことだ」
　全員がはっと天井を見上げた。天窓からガルドが顔をのぞかせている。
「そこまでわかったなら、そろそろこっちとも遊んでもらうぜ」
　ガルドが手を上げる、それは何かの合図のようで。
　次の瞬間、轟音とともに館全体が揺れた。
　壁に亀裂が走り、床がぐらぐらと揺れる。
「何をしたの!?」
「なあに、館を支える支柱を全部ブッ壊したのさ」
「な!?」
「やばい、都！」

飛鳥は驚き、明彦は都の名を叫んだ。
「せいぜい生き残ってくれよ?」
そう言ってガルドは去る。
それと同時に、柱は崩れ、天井が重力に従って降って来る。
そのまま大きな土煙が上がったのだった。

館から少し離れたところで、ガルドはもうもうと立ち込める土煙を見つめていた。
そこに手下の一人がやってくる。
「やりやしたね、ボス。これなら一網打尽ってやつでさぁ」
「そうだな、そうかもな」
喜ぶ手下に、ガルドは気のない返事を返した。
あの罠は本気で作ったものだ。
内部の人間に余程の力がなければ防げはしない。
だからこそガルドは心配だった。
（まさかこれで終わりとかねぇよな?）
対戦相手が心配だった。

もはや勝ち負けがどうとかではないのだ。
全力でぶつけたい、本気を叩き付けたい、それだけなのだ。
だから、それを見たとき、ガルドは口の端を持ち上げて歯をむき出しにして笑ったのだ。

そこにあったのは、館の天井部分をまるまる片手で持ち上げる都の姿だった。
「は？」
手下はあんぐりと口を上げて茫然と眼を見開いている。
「おい」
「え!?　な、なんすかボス」
「棄権しとけ、他の奴らもだ」
「で、でも」
「もうおまえらが出来るこたぁねぇ、邪魔だ」
ガルドの目にはもはや対戦相手しか見えていない。
爛々と輝くその眼に、手下は真剣な面持ちでうなずき、背を向けて走り去って行った。
「さあ、始めようぜ……本気の遊びをよ！」
そして、ガルドは大地を踏みしめ走り出した。

「あいたた、何がどうなっ・・・た、の?」
飛鳥が衝撃から立ち直ると、眼と鼻の先に天井の瓦礫があった。
驚いて見回してみると、崩落してきた天井を直立する都が片手で支えてるではないか。
「な、なんですか、これ」
ジン言葉がないようだった。あまりにもありえない光景だから当然だろう。
「これって、都さんのギフト?」
「はい、そうなります」
都は片手にのせているものが何でもないかのように答えた。
「！　来るよ!」
耀が叫んだ、指さす方を見れば、凄まじい速さで走って来るガルドの姿。
「まずい、迎撃を…」
「やろう」
答えたのは明彦だった。
明彦は、地面に手を付けている。

一瞬いぶかしげに明彦を見た耀は、次の瞬間眼を見開いた。
「地面が、波打って…」
波紋は速やかに広がって行く。
「行け…!」
明彦の言葉に、大地がたわみ、その姿を変貌させる。
まず出てきたのは無数の壁。
それらはガルドの進行を妨害するように立ち並ぶ。
「邪魔だっぁ!」
叫ぶガルドは服を破きながら変身、いや、本来の姿に戻った。
その毛並みは白く、筆で描いたような線が脈動するような模様を描く。
その金の瞳は獰猛な意思を宿す。
白い虎、ホワイトタイガーと呼ばれるその姿。
完全に変身したガルドが吼え猛り壁に突進する。
そして、そのまま水にぬれた障子紙を破るように突き進んだ。
「え、嘘」
明彦はその結果に驚く。
いくら即席の壁とはいえそんな簡単に突破されるわけがない。

そして直感する。あれは、ただの虎じゃあない。
明彦はすぐさま次の手を打つ。
明彦の意思に従って大地はあたかも地獄の針山のように変化。鋭い針が草原の草のように生え揃う。
「都！」
「はい」
さらにそこに都の追撃を掛ける。
なんと都は、見事なフォームで天井の瓦礫を構えると、そのままパイ投げのパイのようにガルドに投げつけたではないか！
瓦礫はまるで壁のように地面を削りながらガルドに迫る。
そして、真っ二つに砕け散った。
土煙が立ち込める中、その向こうに影が一つ立っているが見える。
ガルドは、全くの無傷だった。
その毛並みに一筋の傷も見えない。堪えていないのだ。まるで全身が鉄の塊であるかのように。
今はこちらを警戒しているのか足を止めているが、もう距離はほとんどない。
明彦は乾いた笑顔でこぼした。

「ははっ、冗談だろ」
「ど、どうしましょう」
明彦は後ろを振り返って思案する。
ジンはおろおろするばかりでもとより戦いで役に立つはずもない、飛鳥はそのギフトがガルドに影響を与えられなかったのは把握している。
残るは耀だが…
「耀、行けそう？」
「……行く」
耀は硬い顔でそう答える。
それを見た明彦は肩をすくめた。明らかに無理をしている。
だから明彦はこう言った。
「こっちは僕と都で抑える。そっちは謎解きをしてて」
「え!?　私も戦える」
耀は驚くが、明彦は取り合わない。
「都なら肉弾戦で負けることはほとんどない、無理ならそう言ってくれていいよ」
「無理じゃ…」
「本当に？」

「……」
耀は沈黙する。耀も実力差がわからないわけではないのだ。
「ほんの一日しかいないし、信頼なんてないと思う。頼りなく見えるかもしれない。でも今はかつために信じて」
真摯な眼で耀を見る明彦。
その眼に、耀は折れる。なんでか父親やさしげな瞳がだぶって見えたからだった。
「…わかった、任せる」
「うん、任された」
そういって、明彦は都とともにガルドに向き合った。
『もういいのか？』
「うん、いつでもいいよ」
完全に虎の姿になったガルドの口から人の言葉が出てくる。
それに明彦は答える。
はたから見たら虎にメイドと子供が立ち向かおうとしているある種のユーモアが感じられる光景だろう。だが、明彦は本気だった、ガルドも本気だった。
睨みあい、ふとどちらかともなく笑みが浮かぶ。
楽しげに、満足げに。

「さあ、」

『行くぞ！』

そして、ゲームの行方を左右する戦いが始まった。